

ネットゲをしていたはず
の後輩が異世界召喚さ
れて尊敬する先輩の元
へ帰るために魔王とし
て頑張る話

銅英雄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファンタジーMMORPGの『クロスレヴェリ』を尊敬する先輩に教わった八金当麻（やかねとうま）。

その先輩と同じ目標を掲げて交代で『クロスレヴェリ』をプレイしていた。その目標は敵（リア充）を叩き潰すこと。

今日も元気にリア充を撲滅をし終わり就寝しようとしたら突然異世界召喚されて……？

これは魔王と呼ばれているプレイヤーが先輩のもとに帰るために『クロスレヴェリ』の世界で奮闘する物語。

※このオリ主はホモではありません。

目次

プロローグ	今日も今日とて息を吐くよ うにリア充カップルを撲滅していたはず なのに……。	1
第1話	俺の名は魔王ディア……。	5
第2話	宿屋にて……。	11
第3話	魔術師協会がやってきた。	19
第4話	レムの秘密。	24
第5話	夜の町での騒動。	31
第6話	再会と密会。	37
第7話	冒険者ギルドは良くも悪くも賑	
やか。		41
第8話	自己紹介。	51
第9話	初クエスト。	57
第10話	転移がない絶望にディアベル は頭を抱える。	61
第11話	人喰いの森のエルフ達。	66
第12話	アンズの静かな怒り。	71
第13話	依頼を終えて……。	75
第14話	シエラの気持ち。	82
第15話	依頼分担。	90
第16話	エミール・ビュシエルベル	

ジュっ！……失礼、噛みました。

た国家騎士。

97

第17話 誤解を解いて依頼へと出発。

103

第18話 道中の出来事&とある密談。

107

第19話 攻めてくる脅威。

113

第20話 侵入。

118

第21話 乱戦。

124

第22話 蹂躪劇。

128

第23話 終戦。

134

第24話 防衛。

138

第25話 ファルトラの領主と派遣され

プロローグ 今日も今日とて息を吐くようにリア充カップルを撲滅していたはずなのに……。

俺と拓真（たくま）先輩はファンタジーMMORPGの『クロスレヴェリ』というネットゲを交代でプレイしている。

俺は先輩とルームシェアをしていて共同でパソコンで様々なネットゲを交代でやってきた。というものの節約のためにパソコンは1台で『クロスレヴェリ』をやっていたのだが、先輩が先日アイテムに課金してしまったためにただでさえ貧乏なアルバイト生活なのに今月は更にひもじい生活になっているのだ。

先輩は引きこもりなので俺が外でアルバイトをして生活費を遣り繰りをしているのだ。

「先輩にも外に出て働いてほしいものなんだがなあ……。まあ先輩には恩があるから2人分の生活費を稼ぐのはわけがないがな」

とはいえ最近バイト先から有給休暇をもらっているから『クロスレヴェリ』以外なんにもやることがないんだよな……。

溜まった深夜アニメを見るのも悪くないけど、やっぱり『クロスレヴェリ』だよな！

……この時の俺は魔王として異世界を冒険したりすることになるとは思ってた。た。

「さて、次の挑戦者は……」

今日は俺が日課のリア充プレイヤーの撲滅を魔王として行う日だ。まあリア充以外は手加減するがな。おっ？

「結婚指輪が見えるな。ってことは……いつら……カップルか」

そうそう、申し遅れたが俺と先輩はこの『クロスレヴェリ』では魔王ディアヴロとして恐れられているのだ。

……そもそも『クロスレヴェリ』は魔王復活を阻止するためのRPGなのに、なんで俺と先輩は魔王になってるんだろうか。まあリア充を潰すのには都合いいがな。

俺達が本気を出すのは圧倒的な装備とPS（プレイヤースキル）でプレイヤーを叩き潰すのだが、さっきも言ったように基本的に手加減しているのだ。

そんな俺達が本気を出すのは装備の強い奴？それとも大金持ちの奴？どちらも違う。俺達の本気を出すのはカップルやリア充共だ!!

まあそんなわけで……。

「ふっ殺す」

圧倒的な魔術と相手が使った魔術を反射させてカップルを薙ぎ倒した。

「はん！ネットゲに恋愛なんていらねーんだよ!!……もうこんな時間か。先輩は既に寝ているわけだし、そろそろ俺も寝るか……」

(うん？なんだ？なんか……違和感が)

そう思い俺は上を見上げる。

(知らない天井……って空ア!?)

待て待て！なんで空なんだ!?!俺は外に出た記憶がないぞ!!そう思っていると2人の

女の子が此方を見下ろす。

（かなりの美少女だな……。そんだけ見た目がいいとさぞかしリア充してんだろうなあ。でもよく見ると人間じゃない……。？）

2人は俺に近付いて頬に口付けをした。えっ？なにこのリアルな感触!?

慌てて辺りを見渡すと先輩と暮らしている自室ではなく、それでいて何処かで見た風景だった。

（どうなって……。るんだ……。？）

そしてこれからどうなるんだ……。？

これは俺こと八金当麻（やかねとうま）が魔王として、そして元の世界に戻るためにこの『クロスレヴェリ』の世界で冒険する物語となる。

……こーいうのは先輩の領分なんだが。

第1話 俺の名は魔王ディア……。

この美少女達……よく見ると豹人族にエルフか？どちらも『クロスレヴェリ』にいる種族だな……。

そして俺の腕はこんなに筋肉質だったか……？地面を見てみると鏡みたいに透き通っているの除いてみると、そこには……。

(これが俺か!?先輩と共同で使っている魔王キャラにそっくりだ!どうなってるんだ?)

「これで隷従の儀式は終了ですね」

豹人族の子が口を開く。隷従の儀式だと?どういふことかと考えていると今度はエルフの子が発言する。

「召喚成功ね!これであたしも召喚士なれた!!」

(隷従の儀式に召喚士……ということはここは召喚士が召喚獣を召喚するポイントだ。名前は星降りの塔……。じゃあまさかここは『クロスレヴェリ』の世界なのか!?)

「この勘違いエルフは困ります。いいですか?この召喚獣は私が召喚したのです」

「はあ!?あたしが召喚の呪文を使ったでしょ!」

「おいおい、急に喧嘩しだしたぞ……。」

「そ、それに隷従の儀式の……キ、キスだって……。」

「……それなら私だってしました」

つまりさっきのキスが隷従の儀式ということか？俺はリア充になれると機会を逃してしまったのか。もったいねえ……。

(話を整理すると隷従の儀式によってこの2人のどちらかに隷従されたということだよな？この世界が『クロスレヴエリ』の設定と同じだとすれば召喚獣は儀式によって隷従の首輪をつけられて絶対服従となる……。なんだかなあ……。見た感じ俺と年が変わらない奴に服従とか嫌だ)

「此方の言葉がわかりますか……？」

「おっ？なんだ？馬鹿にしてんのか？豹人族だが日本語喋ってるみたいだしそれくらいはわからあ!!」

「ああ」

「しや、喋った!?!」

「……驚きましたね。召喚獣が言語を理解するどころか発するとは……」

「そんなに驚くことか……？でもそうか。俺は一応召喚獣として呼ばれているわけだから召喚獣が喋ることがとても珍しいってわけだ。」

ゲームでも召喚獣は喋れんし。

「さっすがあたし！初召喚ですごいの呼んじやった！」

「……人型の召喚獣なんて見たことがありません。エルフの魔力では無理です。理論的に考えて召喚したのは私ですね」

「違うよ！あたしの呼び声に応えたんだからね!!」

まあ喧嘩始めやがったよこの2人。パツと見た感じ相性良さげに見えるんだが。

(とりあえず2人を落ち着かせるか……。俺のビジュアルは魔王っぽいし、隷従されているとはいえ舐められん方がいいだろう)

「くだらん争いはやめろ……!」

「っ!」ピクッ

(よし、この調子でいくか!)

「貴様らに命じる……。仲直りの握手をするがいい。笑顔でな!!」

とにかく仲直りさせよう。喧嘩ばかりだと話が全く進まん。

「誰が……。こんな駄エルフ等と……。っ!」ピクッ

「はあ!!悪いのはあっち……。っ!」ピクッ

俺の命令が聞いたのか2人は張り付けた笑顔で握手を始めた。

「……………」グググググ

(わーお、ぎこちない笑顔……。っっていうかあれ絶対手を握りつぶそうとしてるだろ) そう思った瞬間に2人に首輪が出現した。

「えっ?」

(えっ?)

「これは……隷従の首輪?!」

「なんで!?これがつくのは召喚獣の方じゃないの!」

(確かに……。本来なら召喚獣として呼ばれた俺に隷従の首輪がつくはずだが……。ん?)

自分の手元を見ると人指し指に指輪が装備されていた。

(成程、魔王の指輪のせいか……。!)

魔王の指輪とはあらゆる魔術を反射させる超激レアアイテムのことである。

「ふん、貴様らごときにこの俺を隷従できるとでも思ったのか?片腹痛い」

「どういう……。ことですか?」

「俺の魔術反射の能力によって隷従の魔術を跳ね返してやったのだ」

「っ!……魔術反射とは素晴らしい能力ですが、認められません。こんなこと……」

「あたしだって召喚獣に隷従するのなんてやだよ!!」

そりゃ本来隷従するはずの召喚獣に謀反されて挙げ句隷従されるはめになるのは嫌

だわな……。

だとすると俺が召喚獣じゃないことを伝えれば多少は心のダメージが抑えられるんじゃないか？

「……俺は召喚獣ではない」

「……う？ならんたというのです？」

そういえばまだ名乗ってなかったな。よーし……！

「俺の名はディア……」ハッ！

「ディア……？」

待て待て！タイムタイム!!そもそもディアヴロという名前は俺と先輩の合作、或いは先輩が生み出したもの。俺なんかはその名前を簡単に使っていないものじゃない！

つまり見た目はディアヴロのそれでも先輩ではなく俺だけが使っているんだ。ここは新しい名前に、俺だけの魔王になるチャンスだ！

「ねーねー、ディアって名前なのー？」

「ディア……で言葉が詰まっていたからディアの後に名称があると考えるのが妥当でしょう」

とはいえもう既にディア〜で名前を通さないといけない気がした！え〜つと、え〜つと……。

「俺はディアアベル！異世界より推参した魔王だ!!」

「「ディアアベル……」」

しまったああああ!!なんか魔王じゃなくて噛ませ犬っぽい戦士みたいになっちゃったあ!!

「ディアアベル……ですか。私はレム・ガレウです」

「あたしはシエラ・L・グリーンウッドだよ！よろしくねディアアベル!!」

しかもディアアベルで通っちゃってるしい！もうどうにでもなくれ☆

第2話 宿屋にて……。

今現在ディアベルこと俺は2人についていつているのだが……。

「ときにガレウにグリーンウッドよ」

「……私のことはレムと呼んでください。ファミリーネームで呼ばれるのは余り好きではありませんので」

「あたしも。グリーンウッドって呼ばれるのはなんか嫌だもん！」

年が近い女子を名前で呼ぶのはハードル高いんだが……。

でも確かグリーンウッドといえば『クロスレヴェリ』で登場するエルフの王族の家系だったな。これはよくある王族としてではなく、1人の人間（彼女の場合はエルフ）として見てほしいとかいう感じのやつなんだろう。

全く……。名前呼びなんぞ先輩以外にしたことないが、話が進まなそうだしとりあえず応じるか。

「わかった、レムにシエラ。それでこれは何処に向かつてるんだ？」

「近場の町です。とにかく町に戻ってこの隷従の首輪の解除方法を探さなければなりませんから」

成程な……。町に戻れば何かしらの情報が入ると踏んだんだろう。

「もちろんディアベルにも来てもらいます」

（まあ置いていかれると俺もどうしようもないし、一先ずは彼女達についていってここが本場に『クロスレヴェリ』の世界なのかを把握する必要がある）

「ディアベルがいれば百人力だよ！ 話せる召喚獣なんて聞いたことないもん!!」

「だから俺は召喚獣じゃない。……そういえばおまえらはなんのために俺を呼んだんだ？」

これから彼女達に力を貸すとしてもその目的がわからないとこっちとしても協力のしようがないからな。

「あたしは色々あつて冒険者になつただけど、まだ自分がどうしたいのかははっきりとわかつてない感じだな」

「……なんでシエラは召喚士になつたんだよ」

「なんか召喚獣を召喚するつてロマンを感じるんだよね！ それに召喚獣がいるとあたしは1人じゃないつて思うから……」

召喚獣と友達になれたらいい的な理由か……。さっきのシエラの表情から察するに恐らくそれだけではないだろうが、その辺りは追々聞いていけばいいだろう。

「私は冒険者として強さを示す必要があるんです。そのために……貴方の力を貸してく

ださい」

レムはレムで何かを抱えているみたいだ。何故だか知らないが、こっちの事情は早めに聞いておいた方がいいような気がするな……。

「召喚獣じゃないって言ってたけど、それじゃあディアベルって何者なの？」

「……そういえば先程魔王と言っていたみたいですが」

「ああ、俺は魔王と恐れられている者だ！」

今一度自分が魔王であることを示す。これで俺の威厳的なものは保たれたと思いたい。

「本当に魔王だったんだ！すごい……！あたし初めての召喚で魔王呼んじやった!!」

「私が呼んだんです」

「あたしが呼んだんだよ！」

「私です！」

「あたし!!」

また喧嘩してるし……。もうちよつとなんとかならんもんかね？

「おまえらは喧嘩ばかりで……。町に行くんじゃないのか？」

「行く行く！ディアベルがいれば召喚術士として冒険者登録できるんだから〜！」

鼻歌を歌いながらシエラは俺とレムの一步前をはしゃぐように歩く。おいおい、ちゃ

んと前を見て歩かないと……。

ドンツ!!

「きゃっ!」

「おっと……」

言わんこつちやない。前方の人にぶつかったじゃないか。それにしても尻餅をついたときにシエラの胸部がものすごく揺れていたな……いかにいかに! 雑念は捨てる八金当麻!!

「いったらいい!!」

「何やってるんですか……」

「ちゃんと前を見て歩け」

「えへへ……ごめんごめん!」

「私達はともかくあの人に謝りなさい駄エルフ」

「もー! 駄エルフって言わないでよ!……ごめんなさい。大丈夫ですか?」

シエラがぶつかった人に謝罪する。

「ん? 私は問題ないよ。そっちこそ怪我はない?」

「は、はい！大丈夫です！」

「ふふつ、元気がいいね」

「それがあたしの取り柄ですから!!」

すごいなこの人……。あの一瞬でシエラと仲良くなってるぞ。まあシエラのコミュ力が高いのもあるんだろうがそれでもすごい。

その人を見てみるとレムやシエラにも負けない美少女で何故か西部劇に出てきそうなガンマンのような格好をしていた。

「……つと、私はそろそろ行くよ。本来ならば自己紹介とかしなきゃいけないんだろうけど、それはまた次の機会ということでは」

そう言って彼女は去っていった。なんだか独特の雰囲気があるというかすごい大物の予感があるな……。

「……私達も行きましょうか」

「そうだな」

早く町にいかないとな。

???
s i d e

町に向かう途中である3人組と遭遇した。1人は見るからにエルフという感じの少女。1人は猫耳と尻尾を生やした少女。そして最後の1人は如何にもRPGでいうところの魔王な少年だった。

(『この世界』ではあの3人が中心になりそうかな?次に会ったときには色々聞きたいものだね)

そう思っていると2人の少女がこっちに来た。彼女達は私の仲間である。

「待ったかしら?」

「いや、大丈夫だよ。2人は何をしてたの?」

「花を見てたんです。この世界の花はとても綺麗だったので……」

「……つついつい時間を忘れてしまったわ」

「楽しそうで何よりだけど、早く町にいかないと。このままだと野宿することになるよ」

「そうですね。急ぎましょう!」

「ええ」

私や彼女達のこととはまた何れ……。また彼らに会ったときということだ。

???
sideout

ここは『クロスレヴェリ』であったファルトラという辺境都市だ。町並みなんかもゲームと類似している。やはりここは『クロスレヴェリ』の世界なのか……？

「着きました。ここが宿屋です」

「とりあえず中に入ろ〜！」

2人に促されて宿屋に入ると……。

「こんにちは☆宿屋『安心亭』の看板娘、メイちゃんだよ☆」

（あざとつ。一気に不安になったわ）

何が『安心亭』かと思っているとシエラがとんでもないことを言い出した。

「……ねえ、ディアベルをあたしの部屋に泊めたいんだけど」

（は？待て待て！ウエイトウエイト!!年頃の男女が1つ屋根の下は不味いだろうが!!）

「おい、それを本気で言ってるのか？なんで俺がおまえなんかと……」

「だって余分に借りるお金ないし……」

（なんでだよ！召喚するならそういう最低限の金銭は持っておけよ!!）

それくらい準備くらいしておけよ全く……。

「その必要はありません」

おお、言つてやれレム!

「ディアベルは私の部屋に泊めます」

(レムータス!おまえもか!?)

「ええ〜!なんで!?!」

「ディアベルは私が召喚したのですから主として当然です」

「ディアベルを召喚したのはあたしだよ!」

また喧嘩……。こいつらどんだけ喧嘩するんだよ。

「も〜、受付で揉められると迷惑だよ〜?」

ほら見ろ、看板娘(笑)の受付嬢もそう言ってるだろうが。

「追い出すよ……?」ギロツ!

「っ!!」

(うおっ!今のはヤバイ。とんでもない威圧感だ……。あの人は怒らせると面倒だな)

こうして俺達は3人で1つの部屋に泊まることとなった。

これからどういう展開になってくるんだ?

第3話 魔術師協会がやってきた。

……で宿屋にて俺達は3人で泊まることになったのだが。

「……なんであなたと同じ部屋になってしまったのですか？」

「……こつちのセリフだよお」

（宿代が安くなるからこれは別にいい（決してよくない）んだが、この2人はもうちよつと仲良くすべきだな）

1つのベッドに女の子2人は不健全だとか思ってる場合じゃねえな。ハア……。

コンコン

溜め息を吐いているとノックの音が聞こえた。

「……どうぞで」

「失礼致します。レムさん」

レムがノックに対して応答すると女性が1人とその側近と思われる男2人が入ってきた。

レムの客人か。何やら面倒事の予感がプンプンするんだが……。

「そちらの2人は初めましてよね？ 私はセレスティーン・ボードレールと申します」
(セレスティーン……。何処かで聞いた名だ)

「ひよつとしてこの町の魔術師協会のセレスティーン協会長様?!」

「セレスと呼んでね」ニコッ

思い出した……。魔術師協会の長とさえ言えばこの町を守る結果を維持している重要人物。『クロスレヴェリ』のゲーム内ではそうだったはず……。

(そんな身分の人間がこの町に……?)

「今日はレムさんに用事があったのだけれど……」

セレスティーンはレムとシエラについている隸縦の首輪を見てから俺を見る。

「……是非そちらのお話も伺いたいわね」

(成程ね……。やれやれ、面倒事が増えた気がする……)

俺達はボードレール達と話し合うべく下の階の食事処へと移動した。

〜そして〜

「ごっはん〜、ごっはん〜、まっともなごっはん〜♪」

(まっともな食事って。普段ごいつ何食ってんだよ……)

シエラの発言に呆れながらも俺はボードレールの方を見る。

「隷従の儀式に魔術反射……。大変なことになりましたね。ディアベルさん、レムさん達を解放してあげられないのかしら……。？」

（そんなことができたらとづくにやっているのだが……）

「……俺も好きで従わせてるわけではない。できるならとづくにやっている」

「これは……。ーから調べるしかなさそうね……。！」

サーセン！ボードレールさんマジサーセン!!解除方法についてはオナシヤス!!それに……。

「……お願いします」

（まあ俺も奴隷なんて嫌だしな……）

「ところで魔術師協会の長が俺になんの用だ？」

俺としてはごく普通にボードレールに話しかけたつもりなのだが、それがボードレールの側近のお気に召さなかったようで……。

「貴様！ボードレール教に対してその態度はなんだ!?敬意を欠くと容赦せんぞ!!」

（なんだよ。煩えよ。最近の若者は切れ安すぎだろ。ちゃんとカルシウムとつてる?）

「ガラクさん」

ボードレールがガラクとやらの制止をかけようとする。確かに態度が良くないのだ

ろうが、こんな如何にもな小物にとやかく言われるとムカつくな……。

よし、とりあえず脅すか。

「俺に気安く話しかけるな……小物！」ゴツ！

「っ！」ビクッ！

（うむ、仰け反ってるし効いたようだな）

「ガラクさん、失礼ですよ」

再びボードレールが小物（なんかガラクと呼ぶのは嫌だからそう呼ぶことにした。）に制止をかけた。

そして今まで沈黙していたレムが口を開く。

「……セレス、私は魔術師協会本部に行くのも、護衛をつけられるのも嫌です」

「レムさん、私は貴女の力になれたらいいなって思っているの。貴女はこの世界にとつて……とても大切な存在なのですから……」

レムがこの世界にとつて大切な存在……？ どういうことだ？

「……お気遣いには感謝しています。でも自分の身は自分で守りますから……！」

「そう……」

（レムに何か秘密があるっぽいな……。これは早い内に聞き出さないと）

「今夜は失礼致しますわ。首輪の解除方法は調べておきます」

「……すみません」

マジで迷惑かけるね。ボードレール様々だね！

「では」

ボードレール達は去っていったのだが……。

「……キッ！」

(なんか小物に目をつけられたっぽいな。去り際に睨まれてるし面倒くさ。まあそれよりも……)

「……………」

今はレムのことだな。

第4話 レムの秘密。

俺はレムの秘密を問うべくレムに話しかける。

「魔術師協会の長程の大物が訪ねてくるとはな。おまえは何か大きな秘密を抱えている
だろ?」

「……そんなことはありません」

（嘘だ!!俺の直感が囁いてるぞ!レムが抱えている秘密は後々のストーリーが重くなる
展開だ!!）

そもそもお偉いさんが物語の序盤に態々訪ねてくる理由なんてないだろうに。それ
にとっても人には話せないなんてことは早めに知っておいて損はないはずだしな……。

「……………」

（レムは頑なに話さないといった感じか……。しようがない!）

「悪く思うなよ」ガバッ!

「えっ……………?きやつ!」

俺はレムを抱き抱える。どうしても話さないのなら実力行使だ。怨むなら黙りを決
め込んでた己を怨め!!

「軽いな……。ちゃんと飯食ってんのか？」

「ちよつと!!」

「ど、どこ行くの……?」

レムが秘密を話そうとしないのは俺はもちろんシエラもいるからだと思う。ならばサシで話し合いをした方がいいということだ。

「とりあえず先に宿屋に戻ってる」

「は、離しなさい!」ジタバタ

「やなこつた」

俺とレムはシエラを置いていって宿屋へと戻った。

くそしてく

部屋に戻りレムをベッドに座らせる。

「悪かったな。でも俺はどうしても聞きたくてな。何を隠してる?」ギロツ!

「……っ!言いたく……ありません……!」

(つたく、何故そんなに頑ななのかね……?)

「質問を変える。レムはどうして俺を呼んだんだ?」

「それは……私の問題を解決するための援助を……」

その問題こそがレムとボードレールが話していた内容なんだろうな……。

「おまえは俺に隠し事をしたまま力を貸せと言うつもりか……?」

（だとしたら相当甘ったれた考えだな……。まあ俺に隷縦させようとするくらいだから当然と言えば当然なのかね……。?）

「……語れば貴方もきつと私から離れてしまおうでしょう」

（今のレムの発言から察するにレムの秘密は人々に恐れられている何かを持っていると考えるのが妥当か……）

王道的な展開だと自分の中に凶悪な力が封印されているみたいな感じだな。なにそれなんて厨二病? くつ、俺の右腕が……!」

くそしてく

……ゲフンゲフン! つい昔の黒歴史が出てしまった。

「……とにかく話さないことには始まらないだろ。ここには俺とレムしかない。腹を割って話してみないか? そのために態々先に戻ってきたんだから」

「ですが……」

「強情だな。安心しろ、俺はおまえの味方だ」

「……貴方は受け止めてくれるのですか……? 何があっても逃げないと言ってく

れるのですか……?」

「当たり前だ。そのために俺を呼び出したのだろう? 約束しようじゃないか。俺は絶対に逃げない。どんな秘密だろうと俺はレムを受け止めてみせる!」ドンツ!

俺は海賊王になると言わんばかりに宣言した。なんか某ゴム人間の気持ちがあわかつた気がする。

「……っ! あ、ああ……」ポロポロ

「泣け泣け。泣きたい時は思いつきり泣けばいい。すつきりするぞ!」

「うわあああああつ!!」

数分に渡りレムは号泣した。その間の俺はレムが落ち着くまで頭を撫でてやった。

(こうしていると猫を可愛がっているみたいだな……)

くそして〜

「落ち着いたか?」

「はい、ありがとうございます。どんな事情があっても受け止めてくれるって言うてくれたのが嬉しくて……」

こりや今まで辛かっただろうな……。落ち着いたところでレムが話す。

「……私の中には魔王クレブスクルの魂が封じられているんです」

「何？魔王クレブスクラムだど!？」

（『クロスレヴェリ』の公式最強ボスじゃないか！もしこのままストーリーを進めていたらレム……というかレムの中のクレブスクラムが解放されてそいつと戦うなんて展開になるところだったぞ?!）」

「ここは本当に『クロスレヴェリ』の世界だっていうのか……?」

「私の最終目標は自分の中にある魔王クレブスクラムを倒して、その魂を消滅させることにあるのです」

「成程な……。ボードレールの話から察するに魔王クレブスクラムの魂はレムが死ぬと解放されると考えるのが妥当か……」

「えっ?」

レムが驚いているが、俺は話を続ける。

「それに加え現状はそれ以外にクレブスクラムの魂を取り出す手段がわからない。もしも手段があつたら世界中の戦力を集めて、レムを囲み、魂を取り出して倒そうと考えるだろうからな」

「……………」

「周囲の様子を見てレムとクレブスクラムの関係を知っているのはボードレールだけじゃないのかと思うがどうだ?」

「その通りです……。魂の解放は私が死ぬ時。そしてそれをセレスは知っています」

さらにレムの話を聞いて新たに疑問が1つ生まれたのでそれも聞いてみることにした。

「おまえの母親はクレブスクルの魂を抱えていたのか？」

「はい……」

世襲……。なんて残酷な運命だ。もしもこれがゲームの設定なら運営にブーイングするだろうな。特に先輩は。

「事情はわかった。クレブスクルの魂は俺が粉碎してやろう」

「えっ……？」

「とは言え魂を取り出す方法は暫く考える必要があるがな」

某忍者漫画でも人注力を取り出したら人注力を宿していた人間は死んでしまったかな。なんとかそれ以外も考えていかないな。そう考えているとまたレムが泣き出した。

「よく泣くね全く」

「だって……だって初めて離れないって言ってもらえたのが嬉しいんです……！」ポロ

ポロ

「俺は魔王だぞ？パンピーに心配される程か弱くねえよ」

泣き出したレムを落ち着かせるのにさらに数分を要した。
この世界で目標ができたな……！

第5話 夜の町での騒動。

レムが泣き疲れて寝てしまったので俺は外の空気を吸いに行くために宿屋を出た。

(とりあえずレムの信頼はある程度勝ち取ったと思っただけかな……)

ふと夜空を見上げる。今頃先輩は何をしているんだろうか。俺がいなくなっただけで心配してくれているのだろうか？

「おい、そこの混魔族！」

「あん……？」

声をかけられたのでその方向を見ると昼間の小物を筆頭に魔術師協会の連中がいた。

「やっぱり昼間の奴だな。こんな時間にふらつくのは見過ごせんで。亜人は野蠻だからなあ！」

俺を馬鹿にしたように嘲笑う連中。いやいや、酒飲んでふらついてる奴等に言われたくないんだけど……。

(くだらん……) スッ

「なんだ？逃げるのか？」

「気安く話しかけるなど言っただけだ。それに俺は小物に構うほど暇ではないのでな」

そう言つて立ち去ろうとすると小物は酒瓶を投げつけた。おいおい、こんな奴が魔術師協会なのか？ボードレールも大変だな……。

「小物じゃない、ガラクだ。無礼な態度は許さんぞ！」

「人に酒瓶を投げつける奴が礼儀がどうと言うつもりか？滑稽だな」

「僕は魔術師協会の長に近い地位にいるんだぞ！」

（それおまえがそう思い込んでいるだけなんじゃね？）

「おまえのような誰の役にも立たない塵とは違うんだよ！」

確かに俺はこの世界に来たばかりわからないことが多いし役に立つことも少ないだろう。

だがそこまで言われるようなことではないはずだ。しかも小物に言われたことで苛立ちが膨れ上がる一方だ。

そう思い俺は小物を睨み付けた。

「ギロツ！」

「つ……貴様は一目見た時から気に入らなかつたのだ。はあつ！」

小物は俺のことを気に入らないようでどうやら召喚獣を使って攻撃するようだ。

（この世界に来て初めて召喚獣を見るな……。さて、どんなものかね？）

「ふはははは！無礼な態度もここまでだ！この後貴様は命乞いをすることになるぞ！全

てを焼き殺す最強の召喚獣だわからないことが。いでよ、サラマンダー!!」

「グオオオオツ!!」

小物はサラマンダーを召喚した。実物はでかいな……。

「が、ガラク! 町中で召喚獣は……!」

「煩い!……レベル30のサラマンダーだ……!」

(レベル30って弱くないか? 『クロスレヴェリ』の世界のこの町だと平均レベル60前後のはずなんだが。所詮は小物というわけか……)

「謝ればちよつと火傷するくらいで許してやるよ。尤も強力過ぎて死んでしまうかもしれないが……!」

(ウワー、ソレハコワイナー)

「いけ、サラマンダー! あの混魔族を焼き殺せ!!」

「グオオオオツ!!」

(結局殺すのかよ!!)

内心で突っ込みながら俺はサラマンダーの炎を受けた。

「ははははは!!」

「や、やっちまった……」

「煩い! これは制裁だ!!」

(まあ効かないんですけどね)

「こんなものか……」

「なっ……!」

「レベル30ならこの程度か」

「こ、殺せ!サラマンダー!!」

サラマンダーはもう1度炎を吐く。

「やれ……!やれやれ!無礼な役立たずは殺してしまえ!!」

「1つ教えてやろう……。俺のレベルは150だ」

「ひゃ、150!?馬鹿な……。そんな奴が……。そんな奴が存在するはずがない!殺せ!

サラマンダー!!」

「エクスプロージョン!!」 カッ!

サラマンダーよりも速く俺は魔術を使った。消し飛んでいくサラマンダーを見なが

ら俺は呟いた。

「俺に慈悲を期待するなよ……!」

そしてサラマンダーは消えてしまった。

「な、何故だ……。こんなことはありえない……!」

(結構力を抑えたつもりなんだが、強さまでゲームで俺達が鍛え上げた魔王そのままな

のか……)

先輩と一緒にやり込んだゲームの力が俺のこの世界でのディアベルの力になってい
るといふわけだな……。

「只の亜人だろ……？ 役立たずの塵がなんでこんな……」

なんかブツブツと言っている小物に近付くと小物は訴えるように発言した。

「おまえは一体何者なんだ!？」

「我が名はディアベル……。異世界から来た魔王だ!」

(うん、もうディアベルでいいや。この世界ではディアベルとして過ごそう)

「お、覚えてろ!」

小物達は逃げるように去っていった。

(小物は逃げる時も小物なんだな……)

そう思っていると……。

パチパチパチパチ。

後方から拍手の音が聞こえたので振り返る。

「良いものを見せてもらったよ」

拍手の持ち主である一人の女性が佇んでいた。

第6話 再会と密会。

「サラマンダーに対してのオーバークイルな魔術……。中々愉快だったよ」

クスクスと笑う女性を見る。黒のبوبカットに黄色い瞳、細い身体ながらもシエラと同じくらい胸の大きさを持っていた。

「そんなに見ても私は何もしないよ。ちよつと君と話をしたいと思つてね」

「おまえは誰だ？」

「おや？ 昼にも会つたはずなんだけどね」

「なんだと……？」

（こんな綺麗な女性と会つたら忘れることなんかないはずなんだが……）

「……ああ成程ね。そういうことか」

女性は何かを察すると懐からテングロンハットと呼ばれる薄茶色の帽子を取り出してそれをかぶつた。

「これならわかるかな？」

「おまえは昼間の……」

確かシエラがぶつかった薄茶色のコートにそれと同じ色のテングロンハットを身に

付けた女性だった。

「その通り、また会った……とは言ってもまだ名乗ってなかったね。私はアンズっていうんだ。よろしく」

「……ディアベルだ。アンズは俺に何の用なんだ？」

「さっきも言ったけど、君と話がしたくてね」

「話……？」

何の話するつもりなんだ？

「そう、君の世界についてね。……単刀直入に聞くよ。君がいた世界は魔法や剣などは全てゲームになっている……所謂現実世界から来た人間だね？」

(なっ！この人……俺が現実世界から来たことを見破っている!?)

「驚いているみたいだね。なんでわかったのかって顔をしてる。簡単だよ。私も君と同じで現実世界から来た人間だから」

この人も俺と同じで異世界転生されてここに来たというわけか……。

「いや、少し違うかな……。私は今までに様々な世界を旅してきたんだよ」

「様々な世界だと……？」

「うん、私が元々いた世界は麻雀が有名なところで麻雀で競い合う世界だった……。そこから不思議な力を使って優劣を決めるための戦いする世界、さっきの人みたいにここ

でいうところの召喚獣を出して戦う世界、船に乗って海賊と戦う世界、あとはゲームの勝敗によって全てが決まる世界なんてのもあったね。まあ他にも幾つか行っているけど、とりあえずはこんなところかな」

彼女は俺とは違って様々な世界を冒険してきたみたいだ。にわかには信じられない話だが、かなりの信憑性があった。もしも立場が違えば自分がそうなる可能性を感じたからだ。

「それで私は今宿にいる連れが2人いて3人で行動してるんだけど、まだこの世界のことはよくわからなくてね。そこでディアベルにお願いなんだけど……」

「お願いだと……?」

「私にこの世界のことを教えてくれないかな? 最低限のことでもいいんだ。お金の稼ぎ方とか……。私達はこの世界に来たばかりで右も左もわからない状況なんだよ。それでも行き当たりばったりでなんとかこの町には辿り着けたけど、それにも限界があるしね」

「……それを教えて俺に何か得があるのか?」

「……そう言われると弱いね。困ったときは君達の助けになるってことでどうかな?」

(うーん、確かに彼女からものすごく強者の雰囲気があるし、レムの問題にももしかしたら妙案があるかもしれないな……)

「いいだろう。まずは何が知りたい？」

「教えてくれるの!? ありがとう! まずはね……」

それから俺はこの世界についてアンズに教えた。

くそしてく

「ありがとうディアベル! じゃあ明日早速冒険者ギルドの方に行ってくるね!」

そう言っつてアンズは去っていった。

(それにしてもあの人はもしかしたら俺よりも強いかもしれないな。彼女から感じられるオーラというかなんというか……。シエラのように無邪気な所もあればレムのように冷静な一面もある。彼女は様々な世界に行ったと言っていたが、そこから得た物なんだろうか……。?)

そう考えながら俺は宿屋に戻った。

第7話 冒険者ギルドは良くも悪くも賑やか。

(朝か……。昨日は色んなことがありすぎて眠れなかったな)

突然『クロスレヴエリ』の世界だと思われる異世界に召喚されたり、豹人族のレムとエルフのシエラに隷従させられるかと思いきや逆に俺が2人を隷従させてしまったり、魔術師協会に所属している小物に目をつけられたり、同じ境遇を持つ美少女アンズと出会ったり……。

これから俺はどうするべきなのか……。レムの問題解決しつつシエラの問題にも関わっていったら……。というかシエラにその問題を聞かなくてはいけないわけだが、その前にとりあえず……。

「ディア……。ベル……」

「すう……。すう……」

(この2人を起こさないと。このままだと事後みたいになってしまう)

「おい、2人共さっさと起きろ。今日は冒険者ギルドの方に行くんだろ？」

「んう……。そう……。ですね。すぐに準備してきます……」

レムがまだ少し寝惚けた感じで洗面台へと向かった。レムは朝が苦手なのか？でも

まあ……。

「ううん……。あと50年……」

（此方よりかは幾分かマシだがな。どんだけ寝る気なんだよ……）

呆れながらシエラを見つつ、さっさと起こした。

くそしてく

俺達は冒険者ギルドへと向かっているのだが、あることが気になって俺は町の連中に目をやった。

（ドワーフにグラスウオーカー、豹人族にエルフ、そして混魔族。人間が見当たらないな……。見る限りだと一般の人間は1人もいない。ちよつと聞いてみるか）

「この町に人間がいないみたいだがなんでだ？」

「ここは亜人達が住む区画です」

「人間は殆ど来ないよ」

（……となると昨日の小物やボードレールみたいに訪れるという形でしか人間はいないと見ていいな。アンズはこの光景を見てどう思ってるんだらうか）

どうやらこの世界は俺が知っている『クロスレヴェリ』よりも人間と亜人で溝があるらしいな……。益々アンズには住みにくいだろうに。同じ異世界出身としてだろうか

応援というか同情したくなる。

（まあだから昨日も小物があんなに突っ掛かって来たんだろう。人間は亜人に、亜人は人間に何かしらの悪感情を持っている奴が多いと判断しても良さそうだな。例外はあるだろうが……）

もう一つ気になることを思い出したので俺は再び2人に質問をする。

「ところでこの世界はレベルという概念で強さを計っているのか？」

「う、うん……。れ、レベル……。あたしはまだないかな……。？」

なんでシエラはそんなにしどろもどろなんだ……。？そう思い俺はレムの方を見た。

「私はレベル40の召喚術士です。今向かっている冒険者ギルドにはレベルを判定する方法があるのでですよ」

俺が昨日アンズに勧めた冒険者ギルドも俺達が向かっている所である。アンズのレベルがどんなものか気になるというのもあるしな。今度会ったら聞いてみよう。

「そ、そうそう！あたしがレベルないのはまだ冒険者登録してないからで、もし計ったら40とか50だよ！」

「貴方のレベルは10とかでしょう。まあ少なくとも平均より10は低いでしょうね」

「そんなことないもん！」

「あります」

（しかし妙だな……。ゲームでのこの町の平均レベルは60はあるはずだ。小物の時はたいして気にならなかつたが、もしかしてこの世界は全体的にレベルが低いのか？）

「冒険者登録を済ませたらクエストを受けることが出来ますので、クエストを受けに行きましょう。2人にも宿泊費を稼いでもらいますからね」

うん、俺も年下に養われるのはちよつとな……。そのためにもどんどんクエストを受けたいもんだな。

くそしてく

冒険者ギルドに着いたのはいいんだが……。

「舐めてんのか？ おお!」

「舐めるか！ 汚えだろうが!!」

（おいおい、えらく殺伐としてるじゃねえか……）

「少々騒がしいですが、いつものことです。冒険者登録は2階でしますよ」スタスタ

レムはいつも通りだと言わんばかりに2階へと上がった。適応力高えな。その内に俺も慣れていくんだらうか？

「あ、ああ……」スタスタ

「う、うん……」スタスタ

2階に上がる途中で見覚えのある小物がいたのは気のせいであってほしい。

くそしてく

「シエラ・L・グリーンウッド。出身は……」

（文字が読めん。この世界の独白言語なんだろうが……）

「おいシエラ、俺の分も書いてくれ」

「いいの!？」

「細かい作業は好かないからな」

「やった!なんかあたしが主っぽいよね!」

「むう……」

なにやらレムがむくれているが、なんかしたか……?そう思っていると受付嬢がとんでもないことを言い出した。

「で、では最後に此方に血判をお願いします……」

（け、血判だど!?!まあ命を賭ける冒険をこれからするわけだから当然なのか……?）

「少量で大丈夫ですよ」

「うええ、あたしやだな」

その気持ちはわかるぞシエラ!俺もこういうのは得意じゃないからな!!

でもやらなきゃ先に進めないしやるしかないな……。

「こんなので躊躇してたら冒険者なんか務まらないだろ」

（注射と一緒に考えてたら……いや、俺注射も苦手じゃん！こうなったらやけくそだ！）
スパッ！

ブシャアッ！

（やべ、斬りすぎた……。ペットボトル一本分くらい血が出てる。後ろで2人が小さく悲鳴を出してるし、受付嬢も涙目で怯えてるし……）

「とにかく次だ」

「そ、そうだね！これは……？」

「魔力の強さを測定する鏡です」

「でも何も写ってないよ……？」

確かこれに魔力を込めると自分のレベルがどれくらいのものかわかるんだったよな。

「手で触れて魔力を込めてみてください」

「こ、ここう？」 スッ

シエラが鏡に魔力を込めるとシエラが鏡に写し出された。成程、実際はこうなってる

のか。

「わあ、すごいですね！えつと……睫毛が数えられるほど綺麗に写るのが胸元までだからレベルは……」

「いくつ!？」

「30ですね!」

「そんなあく!レムに負けた……」

「私を越えよう等と身の程知らずだったのです」

その割にはほつとした表情だったなレムよ……。

「……なんですか?」

「いや、なんでも」

（レベル30で受付嬢の反応を見る限りだと高評価っぽいけどな。レムのレベル40もひよつとしたらこの辺りではトップクラスなのかもしれない）

「つ、次の方どうぞ……」

「ああ」スタスタ

俺の番だな。というか受付嬢に怖がられてるんですけど。俺の見た目とさっきの出来事が重なって余計にそう見えるんだろうな……。

（魔力を込めるつつつたつてどうすればいいんだ?とりあえず鏡に触れてみるか……）

スッ

その瞬間に鏡に稲妻が発生してそこからとつもない波動が流れた。

「な、なんですか!?!」

「なんか怖い!!」

「ぴゃあ〜!!」

(こりやヤバイな……。とにかく手を離さなきゃ!-) バツ!

俺が鏡から手を離すと誰かが慌てて駆けてきた。

「今の波動はなに!?!」

「ギ、ギルマス〜!」

(こいつがギルマスか……。っていうかなんつー格好してるんだ!)

「ボクはファルトラ市の冒険者ギルドのギルドマスターをやっているシルヴィ。お兄さ

ん達、ちよつといいかな?」

〜そして〜

所変わってシルヴィの書齋的な場所で俺達はシルヴィと対面する。

「鏡があんな風になったのは初めてだね。正直うちでは君を扱うことはできないんだ」

「えっ?」

「どういうことですか?」

「君が高レベルの冒険者なのは間違いないけど、どれ程高いのかわからないんだよ。はつきり言つて人智を越えてる」

「だから俺を登録したところでどんな依頼を任せていいのか判断できないと言いたいわけか……」

「その通り!……強い人を登録できるのは有り難いけど、ボクは君より弱い。そんなボクに命令されて君は納得できる?」

シルヴィの懸念はそこにあるわけか……。

「正規の報酬さえ支払ってくれたら此方としてはなんの問題もない」

「……面白い人だね。わかった。これからよろしくねディアベルさん♪」

「ああ」

シルヴィと握手を交わしたと同時にまた波動が起きた。

『ええ、また!』

3人が同じことを思ったのと別に俺はこの波動の正体を推察していた。

(この波動はまさか……!)

「君達はそこで待つて!ボクは登録所を見てくるから!!」

「俺も行く。この波動の持ち主を見てみたい」

そう言つて俺はシルヴィに着いていき登録所へ走る。そこには……。

「おや、ディアアベル。昨日ぶりだね」

やはりというかそこには異世界の旅人であるアンズが2人の少女を連れてそこにいた。

アンズはこの光景に対して苦笑いだつた。

第8話 自己紹介。

異世界の旅人であるアンズが苦笑いをして鏡の前に立っていた。

「さっきの波動は君が起こしたの？」

シルヴィが気になってアンズに聞いたです。

「うくん、まあ一応ね」

「もう少し力を抑えることはできなかったのかしら？」

「まあアンズらしいですけどね……」

アンズと一緒にいた白髪の少女が呆れながら、赤髪の少女が苦笑いしながら言う。
う。

「これでもかなり抑えたんだけどね……。ディアベルならわかるんじゃないかな？力を抑えたつもりが全然できてなかったって感じの……」

「まあわからんでもないな」

（実際俺もそんな感じだしな……）

「君達は知り合い？」

シルヴィが俺とアンズを見てそう言う。その質問に答えたのはアンズだった。

「昨日知り合ったよ。とはいえ私と一緒にいる2人はディアベルとは初対面になるね」
「そっか。なら君達もボクと一緒に来てもらおうかな。ディアベルさんの連れもいるから自己紹介なんかはそこでやってね。ディアベルさんもそれでいいかな？」

（確かレムもシエラもアンズとは面識があつたな。その時アンズの方は名乗ってなかったけど……）

そう思いながら俺はレムとシエラのところへと戻った。

くそしてく

「ごめんね。おまたせく」

「待たせたな」

「ディアベル、一体何が……って貴方は昨日の……」

「やあエルフちゃん、その節はどうも」

シエラがアンズを見てはまたもや仲睦まじい様子でアンズと話していた。相変わらずコミュニケーション高いな……。

「とりあえず自己紹介といこうか。豹人族の子や私の友人達が空気になりそうだからね」

（確かに。アンズの仲間もそうだけど、何よりレムの存在感が消えつつある）

というわけで自己紹介。

「とりあえず言い出しつぺの私からね。私はアンズ。信じるかは自由だけど、異世界を転々と旅してきた……所謂異世界の旅人だよ」

「異世界……。アンズさんは誰かに召喚されたとかそういうった感じですか？」

「その質問の答えは全員の自己紹介が終わってからにしようか。次はオーフェリアだね」

レムの質問に対してアンズは自己紹介が終わってからにしようということになった。

続いてはアンズの右側にいる白髪を長く伸ばしている少女だ。

「……オーフェリア・ランドルーフェンよ。ある世界からアンズについてきてこの世界へと来たわ」

（オーフェリア……。？何処かで聞いたことがあるような……。ラノベかなんかで見たことがある気がする。まあ今は置いておくか）

「こっち側の自己紹介は次で最後だね。ツボミ、お願い」

今度はアンズの左側にいる赤髪をランドルーフェンと同じくらいに伸ばしている少女。

「私はツボミです。ある世界からアンズとオーフェリアと一緒にこの世界へと来ました」

「次はそっちの自己紹介をお願い」

「じゃああたしからね！シエラ・L・グリーンウッドだよ！」

「レム・ガレウです。よろしくお願いします」

シエラとレムが立て続けに紹介する。俺もそれに続いた。

「アンズには昨日名乗ったが、そっちの2人は知らないみたいだから……。ディアベルだ」

「じゃあ自己紹介も終わったことでさっきのレムの質問に答えるね」

レムがアンズにした質問は俺も気になった。というかランドルーフェンとツボミの自己紹介を聞いて気になることが増えた。

「私は……いや、私達はこの世界には誰かに召喚されたとかではないよ。前にいた世界から旅立ってその次に来たのがこの世界だったってだけだよ」

「昨晚おまえと会った時も様々な世界を旅してきたと言っていたが、そこにいる2人もその旅してきた世界で仲間にしたということか？」

「そうだね。オーフェリアとツボミの紹介にもあったように2人はこことは違う世界から来たんだ。ある世界でオーフェリアを、またある世界ではツボミを仲間にして3人で色々な世界を廻ってきたよ」

「アンズさん達はどんな世界を旅してきたの!？」

「知りたい?じゃあまずは……」

シエラがワクワクしながらアンズにこれまでどんな世界にいたのかを聞いてくる。シエラだけじゃない。レムもシルヴィももちろん俺も気になっている。

それからアンズはこれまで旅してきた世界の話は続いた。

オーフェリア aside

アンズがディアベル達と話している姿を、その様子を私とツボミは見ていた。

「アンズ、なんだか楽しそうですね」

「彼女は私達と会った時もそうだったはずよ。ツボミもそれはわかっているでしょう

？」

「そうですね……」

アンズという人物は最初からあんな感じだった。けれどそれは数あるアンズの顔の内の1つに過ぎない。

その話はまた次の機会があればその時にとということにしましょう。

オーフエリア s i d e o u t

第9話 初クエスト。

「やゝごめんごめん。つついアンズちゃんの話に聞き入っちゃったよ。それに意気投合もしちゃったし！」

（おいおい……。まあ俺も人のことは言えんが）

こんなことになったのはついさっきのこと……。

く回想く

「へえ、じゃあアンズちゃんは麻雀ができるんだ？」

「まあ嗜む程度だけだね」

「じゃあ今度ボクと打ってみようよ！」

「いいよ、機会があったらね」

等とシルヴィとアンズが盛り上がっている。というかこの世界にも麻雀つてあるんだな……。とか思ったその時にツボミが口を出す。

「あの……私達の冒険者登録の手続きやディアベルさん達のクエストのこととかはいいんですか……？」

『……………あつ！忘れてた』

「前途多難ね…………」ハア

ランドルーフエンの溜め息を吐いて呆れた目で此方を見ていたのはこれからも忘れないだろう。

～現在～

「うゝん、とはいえ君やアンズちゃんの実力に見合ったクエストはそうないと思うんだけどなあ…………」

（えらく過大評価されてるな…………。まああれだけの波動を起こしたんだからしょうがないか。それよりもランドルーフエンとツボミの実力が気になるところだな。ツボミの方は剣を持っていることから察するに戦士だとわかる。ランドルーフエンの方は魔術師か…………？アンズの仲間ということもあつて未知数だな）

「……………うん？これは新しいクエストかな？でもこれは…………？」

シルヴィが此方を見て何やら思案顔をしていた。新たに入ったクエストに俺達が何か関係あるのか？

「どうしたのですか？」

レムも気になったのかシルヴィに質問する。

「んーちよつとねー。……少し匂うけどやってみる?」

そう言つてシルヴィは俺に依頼書を渡す。いや、俺ここの文字が読めないんですけど……。そう思つているとアンズが俺から依頼書を引つたくる。

「うーんどれどれ?」

「読めるのか?」

「問題ないよ。この世界の言語は昨日の内に一通り覚えたからね」

マジかよ!すごつ!アンズさんすごつ!!

(……アンズの理解能力はとんでもないものよ。前に私達がいた世界もその世界の独自の言語だったのだけれど、彼女はそれを一晩で覚えたわ)

(すごいですよね……。私達もまだこの世界の言語は半分も覚えてないというのに……)

ランドルーフェンとツボミが俺にアンズが如何にハイスペックなのかを耳打ちで教えてきた。俺だけに教えたのは俺がアンズ達と同じ境遇だからだろう。

「人喰いの森に出てくるモンスターであるマダラスネイクを討伐するクエストだつて。それで実験のためにそのマダラスネイクの目玉が必要つて書いてあるね。魔術師協会の人々が依頼主みたいだね」

(魔術師協会?ボードレール達か?いや、それとも……)

「そうだ！折角だから君達6人でやってみたらどうか？依頼主の方にはボクから依頼料は多くもらえるように言っておくから！」

シルヴィが突然俺達とアンズ達で依頼をこなすように提案してきた。それに対してアンズ達は……。

「私達は依頼をもらう立場だからね。君達さえよかつたらそれでいいよ」

「……私はアンズがそれでいいなら構わないわ」

「私もアンズがいいならOKです」

このことらしい。俺はどちらでも構わないのでレムとシエラに聞いてみることにした。

「あたしは賛成！アンズさん達も強そうだし、人喰いの森のモンスターはすつごく強い魔獣が出るから心強いよ!!」

「……私も構いません。アンズさん達の実力も気になるところですし」というわけで……。

「此方も異論はない」

「じゃあ決まりだね！」

「よろしくねディアベル」

こうして6人組が誕生した。初クエスト頑張ろう！

第10話 転移がない絶望にディアベルは頭を抱える。

俺達6人は人喰いの森に向かって歩いてるのだが……。まだか!?結構歩いたぞ! 具体的には2時間くらい!!

「人喰いの森にはあとどのくらいで着くんか?」スタスタ

「えっと……。地図を見る限りだと歩きだとあと3時間はかかるね」スタスタ

俺の隣にいるアンズがそう答える。ダニイ!?往復移動で10時間だと!?

「……依頼にも時間制限があるでしょうし転移とかが使えるといいのだけれど」スタスタ
タ

「転移とはなんででしょうか?」スタスタ

俺とアンズの前を歩いているランドルフエンとレムがそんな会話をする。あれ?もしかして転移を知らない?

「転移というのは最後に訪れた町へ帰還する魔法ですね。冒険者には必須事項だと思うんですけど……」スタスタ

「或いは帰還アイテムの常備とかな。帰還アイテムなら最初の方の町でも手に入るはずだが……」スタスタ

レムとランドルーフェンの前を歩いているツボミが転移の重要性を説明して、俺が更に補足説明をする。

ランドルーフェンやツボミも知っているということはアンズから聞いた、或いは直に体験しているからなんだろうな。

「そんなのあつたらみんな使ってるよ〜！」スタスタ

「ディアベルやアンズさん達が旅してきた世界ではそういった転移とかが当たり前なのですか？」スタスタ

ツボミと歩いているシエラが笑いながら転移の存在を否定して、レムが俺達に質問する。その答えを代表してアンズが答えた。

「そうだね。さつきツボミが言っていたけど冒険者なら転移魔法または帰還アイテム必須だよ。時間短縮にもなるし、何より自分達の状況が危険な時に大助かりだからね。それに加えて回復魔法と回復アイテムはセットで常備するのが冒険者の基本と言っても過言じゃないかな」スタスタ

「……そんなに大袈裟なものなんですか？」スタスタ

「その準備にどれだけお金がかかるんだろう……」スタスタ

アンズの言っていることは大袈裟でもない。ゲームでは全て基本中の基本だ。ましてやこれが現実なら尚更である。それにしても……。

(まだ歩くのか……? インドアにはキツイぞ……) スタスタ

(転移や帰還アイテムがこの世界にないのは予想外だったなあ……) スタスタ

(ここでは私達が今まで使ってきた転移魔法や帰還アイテムは通用するのかしら……?) スタスタ

(片道5時間歩くのはとても大変ですが、自然が美しいですし、道中に咲いてる花も綺麗ですから苦にもなりませんね。寧ろ楽しいです!) スタスタ

俺とアンズ達がそれぞれこう思っていた。

くそしてく

(マジで移動に5時間かかった……。やっぱ現実つくソグゲーだ)

まあとにかく人喰いの森に着いた。さっさとマダラスネイクを倒して帰りたい……。

「マダラスネイクって何処にいるのかな?」

「体長は20mで普段は沼に生息して近くに獲物が来ると襲ってくる筈です」

「……じゃあ沼を覗き込んでるシエラは危ないんじゃないかしら?」

「ええっ! 早く言つてよ!!」

「あはは……」

沼を覗き込んでるシエラにレムが説明して、ランドルーフェンがその感想を言って、

ツボミが苦笑いしているという構図の完成です。とまあそれはさておき……。
(ゲームのグラフィック以上に不気味な森だな……。マツプ表示もないし、迂闊に歩き
回ると危険か)

そう考えているとシエラが突然こんなことを言い出した。

「……? この森のクエストってあたし達だけでやるんだよね?」

「当然です」

「じゃあ人喰いの森って意外と人が出入りしているのかな……?」

「命が惜しい者なら近付きません。何故そう思うのですか?」

「気配があるでしょ? 森の中に……」

「!!」

(シエラはこの森に何者かがいるのに気付いたというのか!?)

「……この世界のエルフは気配に敏感みたいね」

「もしかしたら彼女だけのものかもしれないけどね」

「数は10人いますね……。待ち伏せされてたんでしょうか?」

(しかもアンズ達も気付いてるみたいだし、コイツらとんでもないねえな……!)

「シルヴィが匂うと言っていたのはこのことのような」

「えっ? 何が!」

「貴方は馬鹿なのか大馬鹿なのかわかりませんね……」

「なんで!？」

とりあえず待ち伏せしてる奴等を撃ち落とすかと考えていると……。

「ここは任せてよ。重力操作……重化!」ブアッ!

アンズが前方に何かを撃ち出した。衝撃波か何かか？

『ぐわっ!!』ドサドサッ!

待ち伏せをしていた連中10人が落ちてきた。コイツらはまさか……。

「エルフ!？」

「どうやら私達を待ち伏せしていたのはエルフ達みたいだね」

「そうだな……」

「この依頼は一体どうなるんだ……?」

第11話 人喰いの森のエルフ達。

「くっ！妖しげな術を……!!」

待ち伏せをしてたエルフの1人がそう言う。まさかとは思うがコイツらは……。

「セルシオ！なんでここに!!」

「やっぱりというかシエラの知り合いみたいだね」

「シエラ様！貴方をお助けするために馳せ参じたのです!!」

（なんだか私達が悪者になつてるような気がするのは気のせいかな？）

（大方誰かに法螺を吹き込まれたと考えるのが妥当でしょうね……）

（一体誰がなんのためにこんなことをしたのでしょうか？）

「奴隷商人！グリーンウッド王国の高貴なる姫で在られるシエラ・L・グリーンウッド様を返してもらおうぞ!!」

セルシオとやはらは俺のことを奴隷商人だと思っているらしい。まあ何故そう思うのかは予想がつくが……。

そういうええばすつかりグリーンウッドというのがエルフの王家系であることを忘れてたな……。

レムも信じられないような目でシエラの方を見てるし。

「……何故エルフが魔術師協会の名前で依頼を出した？誰に頼まれたかは知らんが、俺は奴隷商人じゃない」

「黙れ！奴隷の首輪が何よりの証拠だ！シエラ様の首輪を外せ!!」

（やっぱそうなるよなあ……。まあ魔術師協会で俺に恨みがある奴といったらある程度予想できるがな）

「ああ、やっぱりシエラとレムに着いている首輪は奴隷の首輪なんだ？」

（止めてアンズさん！もうディアベルのライフは0よ！）

「早く首輪を外してあげてください！」

（更にツボミの追い討ち!?!俺だって好きで首輪着けさせてるわけじゃねえよ!!）

「……いい御身分ね、少女2人を奴隷にするなんて。2人を使って毎日お楽しみかしら？」
クスクス

（ランドルーフェンに至ってはわざとだよな？状況は自己紹介の時に説明したよね!!）

「貴様……!!」ギリッ!

（セルシオとやらを煽っただけじゃねえか!!全く……）

やれやれと頭を抱えるとシエラが前に出てきた。

「王家なんてどうでもいいよ!!」

「シエラ……?」

「王家の皆様は貴方のことを心配しておいでです!」

「兄さん達が必要としているのはあたしじゃなくて世継ぎでしょ!? あたしに子供を産ませたいだけなんだよ!!」

「重要なお役目です!」

(世継ぎねえ……)

《僕はキメ顔でそう言った》

《いえーい、ピースピース》

《貴方の住まいに心を構える永遠の死体人形、斧乃木余接だよ》

「ブフオツ!」

「急に吹き出してどうしたアンズ……?」

「い、いや……なんでもな、ないよ……。ちよ、ちよつとお、思い出し笑いを……。くくつ
!」プルプル

何かツボだったんだろうか……。? それよりも今はシエラだな。

「好きなこともできないで、望まない相手と結婚して、そんなの可笑しいよ! あたしは絶

対に国には戻らない！自分の力で生きていくんだから!!」ドンッ！

(……………いい覚悟だ)

シエラはシエラなりに色々と問題を抱えているんだな。普段の能天気な性格では考えられん。まあ会ってまだ1日しか経っていないが……………。

「しかし今は奴隷ではありませんか！」

「違う！あたしは誰の奴隷でもない！あたしはあたしだよっ!!」ドドンッ！

(彼女の性格からは考えられないわね……………)

(これもアンズが言っていた人は予想を越えてくるというものでしょうか……………?)

(かもしれないわね。まあ彼女はエルフだけけど……………)

「……………事情があるようですが、貴方は1人で生きていくには無力すぎます」

(……………かつちーん) プチッ！

(っ！これは……………)

(アンズが怒ってますね……………。あの時程ではないにしろ怒ってます)

「我々は力付くでも貴方を連れ戻します!!」

「うう……………」

「よく言いました。貴方にしては上出来です。国を捨てて1人で生きていくという決意は私は嫌いではありませんよ」

「レム……」

(レムもシエラの決意に何か感じたようだな。これを機にもう少し仲良くしてくれればいいが……)

「致し方ない……。みんな！」

セルシオとやらがエルフ達を指示して此方に攻撃しようとしてくる。しようがない、こうなったら俺が……！

「はいはいストツプ〜」

「アーンズ……？」

突然アーンズがエルフ達の前に立ち塞がった。

アーンズは笑顔だが何処か怒気を感じた。一体何をするつもりだ……？

第12話 アンズの静かな怒り。

俺がエルフ達を止めようとするのとアンズが突然前に出てきた。

「そのエルフさん……セルシオだったっけ？」

「な、なんだ!？」

「君は間違いを4つ犯した。1つ目はシエラを無力だと勝手に決めつけたこと、2つ目に誰から聞いたか知らないけどディアベルを奴隷商人だと言ったこと、3つ目は私達を敵に回したこと、そして4つ目は……。私の仲間であるシエラとディアベルを侮辱したことだよ……!」ゴツ!

「アンズさん……」

(仲間……?)

アンズは俺のことを仲間だと思ってくれてるのか……?

「くっ……! 射て!」バシユツ!バシユツ!

「くだらない……」バシツ!バシツ!

セルシオ達が放った矢をアンズが全て受け止めた。すごいな……。

まああいつらが放ったのは普通の矢だけど、それでもアンズはすごいと思う。本当に

人間か？

「こんなので私にダメージを与えられると思ったの？ 興醒めだね。普段何と戦ってるのかな？」

「我等を愚弄するか!？」

「質問しているのは此方なんだけど……。魔族や魔獣と呼ばれる敵とは戦ってないの？」

「と、当然だろう!」

（成程な……。この世界が本家『クロスレヴェリ』よりもレベルが低いわけだ……）

「くっ! 化物め……!」 スッ

そう言ってセルシオが出したのはゲームで何度も見た突風の矢というアイテムだ。

「なんかえらく風が吹いてる矢だね。それなら多少はダメージを受けるかもね」

（俺もあれならもしかしたらダメージを受けるかも）

「当然だ! これは陛下より授かった秘宝である突然の矢! 全てを穿つ至高の矢だ! 貴様の邪悪ごと貫いてくれる!!」

「逃げてアンズさん! あの矢はダメ!!」

「ふーん、そんなにすごいんだ……。なら私も攻撃しようかね……」

「どうするつもりだアンズ?」

「それはね……つと、こんなところにいる感じの石を発見……」

「石だ?!? そんなので突然の矢を防げるのか!?!」

「貫け!!」バシユツ!

「まあ見ててよ……。目には目を、歯には歯を、風には風を……。ウルトラソニック!!」
ビシユツ!

セルシオが放ったの突然の矢に対してアンズはそこに落ちていた石ころを投げた。するとアンズが投げた石に突風の矢と同じかそれ以上の風が吹いた。

ガキンツ!!

「な、なにっ!?!」

突風の矢は石によって弾かれて石の方はまだ勢いが衰えずに風を放ちセルシオ達を襲った。

「があああっ!」

「いい感じに吹き飛んでくれたね」

「久々に見たわね。貴方の魔球を……」

「まあ結構技の使い勝手がいいからね。それに今回は一番威力を抑えた技なんだけど、

案外負傷させられるものだ」

「6属性の攻撃は汎用性がありますもんね」

ランドルーフェンとツボミは何度もこれや似たような技を見ているらしく、これでも威力を抑えているらしい。

それにしても魔球って……。

(全くとんでもないなこの一派は……)

俺はアンズ達を見ながらそう思った。

第13話 依頼を終えて……。

「さて、その木の裏に隠れている人はそろそろ出てきたら？」

アンズは前方の木に向かって言い放つ。誰か隠れているみたいだが……。

「出てこないの？それなら無理矢理にでも出てきてもらおうよ……う？」ゴツ！

（っ！……さつきも感じたが、すごい闘士だな……。本当に俺より強いんじゃないのか？全く……チートすぎんだろ）

アンズが殺気を放つと誰かが怯えた様子で前方の木から飛び出した。

「くっ……！」

（あれは小物か……。成程、この依頼はコイツが何かを企んでエルフ達に変なことを吹き込んだというわけか。見かけた時は気のせいだと感じていたが、ただ俺が嫌いなんだよ……）

「お、おまえらはエルフ族の精鋭部隊じゃなかったのか!?この役立たず!!」

しかもセルシオ達のせいにしてるし……。救いようのないクズだな。

「おい」

「ひっ！」

「どうやらこれはおまえがけしかけたみたいだな小物」

「彼は確か昨晚フアルトラで見かけた人だね。サラマンダーを出してディアベルにオーバーキルかまされてたのは傑作だったよ」クスクス

「そういえばアンズは昨日の光景が面白いものだと言ってたな……。まあそれは置いていて。」

「なんとか言ったらどうだ小物?」

「い、いや……。ぼ、僕はその……。エルフの王女がここに来ると教えてやっただけで……。しどろもどろで小物が答える。言い訳にもなつてねえんだよ……。俺が呆れているとアンズが小物に問い質した。」

「ディアベルのことを奴隷商人だと思つていたみたいだけど、それも君が吹き込んだことなんだよね?」

「か、勝手に勘違いしたんだ! 亜人は頭が悪いからな!!」

また人(エルフ)のせいにしたよコイツ……。

「救いようのないクスだね。魔術師協会っていうのはこんなクス共の集まりなわけ?」ギロツ!

アンズが小物を睨みつつ、俺達に魔術師協会のことを聞いてきたので俺の直感とはいえ正直に答えた。

「いや、確かにこんなくだらないことをする小物もいるが、魔術師協会の長であるセレス・ティーンヌ・ボードレールはまともな奴のはずだ」

（まあ二言三言くらいしか会話してないから果たして本当にそうかは定かではないが……）

「ふうん、まあいいや。ねえその君」

「ひつ！な、なんだ!?!」

「もう2度と私達に関わらないでね。もし次にこんなことがあったら……朝日は拝めないと思ってるね♪」ボソツ

「あつ……がつ……うう……」ブルブル

アンズがなんかボソツと言ってたが何を言ったんだ？小物が矢鱈震えてるし。そう思っているとレムが小物に追い討ちをかけた。

「セレスはなんと言うでしょうね。貴方が魔術師協会の名前を語り、私達を罠にかけたと知ったら……」

「……違う。ぼ、僕は間違ってる！」ダツ！

小物は捨て台詞を吐いて逃げていった。あくあ、なんとという情けない姿。しかも転んでるし。

そう思っているとシエラがエルフ達に発言した。

「兄さん達に伝えてくれる？あたしは絶対に戻らないって。あたしは兄さんのものじゃなくて今はディアベルとレムと……それにアンズさん、オーフェリアさん、ツボミさんの仲間だから!!」

(仲間……か。俺はリアルでは先輩以外の人間には最低限にしか関わってなかった。況してや仲間、友達なんて信用してなかった……。それをさっきのアンズと言ひ、今のシエラと言ひ……俺を仲間だと言ってくれて……。俺はそれにどう応えたらいいんだ……?)

「……はい、キエラ様達にはそのように伝えておきます」

そう言つてセルシオと愉快なエルフ達は去つていった。

「さつ、早く帰ろ！おなか減っちゃったし!!」

「全く……。私はいつから仲間になったと言うんですか？」

「ええ!!さつきあたしのことを気に入つたつて言つてたのに!」

「決意が嫌いではないと言つただけです」

「あれ？照れてる？頬赤くなくい？」

「こゝこの馬鹿シエラ!／／／」

また喧嘩してるし……。まあこの2人はこれが平常運転なのかもな。

くそして

「ファルトラに戻り、報酬もボードレールに多めにもらい（小物の件ですごく謝られた）、俺は今宿屋の外で考え事をしている。

（仲間……。シエラは俺のことを仲間だと言っていた。これは俺を信用してくれていると思ってもいいんだろうか……。？レムも魔王クレブスクルのことを話してくれてからも俺を信頼している感じだし……。ああ！なんか色々ところんがらがっちゃう!!）ガシガシ

「ディアベル、隣いい？」

「頭を掻きながら悩んでいるとアンズ達が此方に来て腰を降ろし、ランドルーフェンとツボミもそれに合わせた。あの、俺まだ有無を言っていないのですが……。」

「何の用事だ？」

「ん？これからの私達についてちよつとね」

「俺達の……？」

「そう、今回の依頼は私達6人で受けた……。ならその次からはどうするかってこと」
「そういうことか……。」

「私達としては少なくとも暫くの間はディアベル達に色々教えてほしいと思ってるよ。シエラも私達を仲間と言ってくれてたから私達がこの世界にいられる間ずっとでも構

わない……。これは3人共同意見だった」

「此方もそれは構わないが、今回みたく6人で行動というのは少し大人数じゃないか？報酬も少なくなるだろうし……」

「そこは2つの依頼を分担して受けたりすればいいんだよ。これなら分け前が減ることはないしね」

「それにディアベルはこの世界のことを熟知しているみたいだから私達にもつとこの世界のことを教えてほしいのよ」

「私も新しい仲間が増えて嬉しいです！」

「これが私達の意見だけどディアベルはどうする？」

俺が大人数で1つの依頼を受けた時のデメリットを伝えるとアンズ、ランドルーフェン、ツボミがそれぞれメリットや気持ち伝える。

アンズ達が仲間になるのはとても心強い。未知数ではあるがランドルーフェンとツボミもかなりの強さを持っているだろうし、レムやシエラの問題を解決するのに彼女達の力は必要になるだろう。

というよりアンズ達が敵になると色々ややばいかもしれないというのが本音だったりするんだけど……。まあとにかく断る理由はない。

「わかった。これからよろしくな」

「うん、これからよろしくね」

「ええ、よろしくお願ひするわ」

「はい、よろしくお願ひします！」

「レムとシエラにも伝えておいてね」

「了解だ」

こうしてアンズ達も俺達と一緒に冒険することになった。

そしてランドルーフェンにはこれからオーフェリアと呼ぶように言われた。何故一度も口に出したことはないのにわかったのか……。

第14話 シエラの気持ち。

「じゃあ私達は〇〇号室で寝泊まりしてるから」

「わかった。俺達は△△号室だ」

そう言ってアンズ達と別れた。オーフェリアとツボミが冷たい目で見ていたのは気のせいだと思いたいね。

部屋に戻るとシエラしかいなかった。レムはまだ戻ってないのか……。

くそしてく

「レム、遅いね……」

「そうだな……」

（正直部屋に女子と2人つきりなのは気まずい。早く戻ってきてよレムえもくん！）

「セレスさんにさっきのことを報告につて。そろそろ戻ってくるかな？」

「多分な……」

しょうがない。先にシエラにアンズ達のことを言っておくか……。

「シエラ、これからはアンズ達と6人でチームを組むことになった。まあ1つの依頼に

6人全員で行くと報酬が少なくなるから1つの依頼を3人で受けて、もう3人はまた別の依頼を受ける形になるだろう」

「そっか、アンズさん達が……。それにしてもアンズさんすごかったよね！見たこともない魔術でセルシオ達を木から落したり、石を投げたらそれが突風の矢みたいにすごい風を纏わせたり……」

（それは俺も思った。今日見た技だけでもレベル100以上の実力はある。オーフェリアやツボミもそれに匹敵する強さを持っていると見てもいいだろう……。しかもアンズはまだまだ力を隠している感じだった。彼女が本気を出したら俺なんか足元にも及ばないんだろうな）

レベルで1つ思い出したことがあるので間を待たせるためにもそのことをシェラに話す。

「レベルについてわかったことがある」

「えっ……?」

「この世界の奴等は死なないように過ごしてるんだ。なるべく安全にな……」

「普通はそうじゃないの……?」

（ゲームのように救済措置やリセットがないからな。死んだらそこで終わり……。だから危険を犯してレベルアップを行うのは生身の人間にはリスクが大きすぎるんだよな

……)
それでも……と口を開こうとしたときに……。

コンコン

(ノック……? 誰だこんな時間に?)

「どうぞ」

「ディアベル、さっきのことで少し言い忘れたことがあるんだけど……取り込み中だったかな? 出直そうか?」

俺が返答すると入ってきたのはアンズだった。

「いや、丁度いいかもしれない。アンズさえ良ければ俺の話聞いてくれ」

「構わないよ。私の話は最悪明日でもいいしね」

アンズはそう言って話を聞く体勢に入った。

「……俺は死ぬことがあっても早くレベルアップが効率を最優先にしてきた。そういう世界にいたんだ。これに対してアンズはどう思う?」

「……私はその意見が必ずしも正しいとは思わない。けど私達は幾度も死線を潜り抜けて来たから今の私達がある……。だから1秒でも早く強くなるためならさつきディア

ベルが言っていたやり方が最善なのかもね」

(アンズ達は俺みたいにゲームではなく現実……というより異世界で命かけだったんだ。だからその重みがよく伝わってくる)

「ディアベルやアンズさん達は命が大切じゃないの？」

シェラの質問にアンズはこう答えた。

「もちろん大切だよ。でもそうも言ってもらえない時が何れ来るかもしれない。昼間に私達が旅してきた世界の話をした時も言っただけど、ここに類似している世界で旅する時は旅を始めたと同時にいつどんな危険があるかわからないんだ。だからそれに備えて可能な限り自分を高める。それはこの世界に来てもそれは変わらないよ」

「危険に備えて……自分を高める……」

「まあどうするかはシェラ次第だと思うよ。じゃあ私はこれで失礼するよ。2人共また明日ね。レムにもよろしく」

「ああ、また明日」

アンズは自分の部屋に戻った。それと同時にシェラは何かを決意したみたいである。

「ディアベル、あたしは強くなりたい……」

「そうか……」

「ねえ、アンズさん達は何処に泊まってるかわかる？」

そんなことを聞いてどうするつもりだ……？

「……〇〇号室に泊まつてるって言ってたぞ」

「わかった……。ありがとね！」 ダツ！

「おい、シエラ！」

俺の制止を聞かずにシエラは部屋を飛び出した。それと同時にレムが帰ってきた。

「今シエラが部屋を出たみたいですが、何かあったのですか？」

「……さあな」

アンズの部屋を聞いたということはシエラはアンズに……。いや、これ以上考えるのはやめておこう。

そう思い俺はベッドに寝転んだ。

アンズ side

オーフエリアとツボミが寝たので私は明日からのことについて考えていた。

(この世界はディアベルを中心に成り立っていると思っていたけど、どうにもそれだけじゃないみたいだ……。今日の依頼でわかったことはシエラが何かしらの問題を持っているということ。それに恐らくレムも何かを抱えていると思っていいいね)

コンコン

(ノック……?こんな時間に?この気配は……)

「どうぞ」

「失礼します……」

入ってきたのはシェラだった。

「……アンズさん」

「どうしたの?」

「あたしを……あたしを強くしてください」

「要するに私がシェラを鍛えればいいんだよね?」

「はい……!」

「……それはいいけど、どうしてそう思ったの?」

「……あたしはこのままじゃ駄目なんです……。みんなの足を引っ張ってしまうから、そんなのは嫌です!もつと、もつと強くなりたいんです!」

「……良い目をしてる。ツボミもこんな感じで私に自分を鍛えてほしいって言ったっけ」

「シエラの決意はわかった。とりあえず明日から強くなるためのメニューを組むからそれに従って鍛練をすると基礎能力がかなり鍛えられると思うよ」

「ありがとうございます。失礼しました！」

そう言つてシエラは部屋に戻つていった。それと同時にツボミが目を覚ました。

「……誰か来てたんですか？」

「ツボミ、起こしちゃった？ごめんね」

「いえ、気にしないでください」

「ありがとう。さつきシエラが来てたよ。強くなりたいんだつて」

「なんだか私の時を思い出しますね……」

「私も同じことを思つてたよ」

「私はあの鍛練メニューで強くなりましたが、同じメニューを組むんですか？」

「似たようなメニューにはするつもりだよ。シエラがどういう戦い方をするかにもよるんだけどね」

しかしディアベルに頼まなくても良かったのかな？見た感じだとディアベルもかなりの強さを持つてると思うんだけど……。

「その内シエラさんも私達の旅に同行するかもしれないですね」

「かもね。まあそれは彼女次第だよ。じゃあ私はシエラの鍛練メニューを組んでおくか

「らツボミは先に休んでて」

「……わかりました。アンズも頑張ってください！」
「うん」

さて、新しい仲間のためにも頑張りますかね……！

アンズ side out

第15話 依頼分担。

前の依頼から数日が経った。俺達6人はシルヴィに呼び出されている。

「態々来てもらってごめんね。この前やってもらったばかり悪いんだけど、ディアベルさん達をご指名の依頼だよ」

「ピンポイントで私達を指名ということはもしかしてまた魔術師協会からの依頼かな？」

「ええ、また罠なんじゃないの？」

シルヴィが俺達を指名する依頼を伝えるとアンズが魔術師協会からの依頼だと推察し、シエラがまた罠なんじゃないのかと勘繰る。

しかしその心配はないようで……。

「あはは、今度のは大丈夫だよ。なんせ魔術師協会の長であるセレスティーナ・ボードレールから直接ボクが受けたんだからね♪」

「セレスからですか？」

「しかも簡単な割に高報酬だよー」

「小物の件の感謝料か……?」

(どうもそれだけじゃないような気がするけど……)

「まあそういうことだろうね」

「ふうん……?」

「アンズ……?どうかしたんですか?」

「……いや、なんでもないよ」

アンズは何か裏があるんじゃないかと考えているみたいだ。確かにこの前ボードレールから直接謝罪を受けて尚且つレムがボードレールに追加報告に行ったみたいだからこの依頼は何処か妙だと思ってるんだろう。俺もそう思う。

「……私は行きません」

「えっ?」

「セレスには借りを作りたくありません。普通の依頼なら構いませんが、不要に報酬の高いクエストはお断りです」

(レムは真面目だな……)

「でも正直助かるよね!あたし達あんまりお金ないし……」

『う、っ……!』

「あはは……」

シエラの金欠発言に俺達は苦虫を噛み締め、ツボミは苦笑いしていた。だからこそア

ンズの提案を呑んだようなもんだしな……。

「簡単な依頼だし全員揃ってなくても大丈夫だと思うよ」

「どうするのディアベル？」

「ふむ……」

シルヴィが態々6人で行く必要はないと言い、シエラはどうするのかと俺に委ねる。

「ねえシルヴィ、ちよつと他の依頼を見ても言いかな？」

「うん？ いいよ」

「ありがとう」

アンズが他の依頼書を見ている間に俺は1つ考えていた。

（この依頼の報酬を宿代に当てて少しでもレムを楽にさせたいな。それに……）

「……………」

（レムの表情を見ると余程ボードレールに借りを作りたくないのかがわかるしな）

「なあレム、来たくないなら無理して来なくてもいいぞ」

「……………そうします」

「レムちゃん是不参加……つと。他の5人はどうするの？」

シルヴィがレムの不参加を確認して俺達にボードレールからの依頼を参加するかを

訪ねた。するとアンズがレムに質問をする。

「……私達は6人いる。だから2つ以上の依頼を分担して受けるつもりだよ。レムはこれとは別の依頼を受けるつもりはない?」

「……すみません。私は今日は宿に残ることにします」

「そ、わかった。……シルヴィ、私はこの依頼を受けようと思うんだけど」

「あれ? ディアベルさん達とアンズさん達は同じチームじゃないの?」

「依頼を分担するだけだよ。それで報酬を山分けして金欠から脱しようよね」

「ふーん……成程ね。わかったよ」

こうして俺達は依頼を分担して受けることになった。

「じゃあまずはディアベル達が受ける依頼はどんな感じなの?」

「えーっと、ウルグ橋砦へ差し入れの配達……って書いてるよ」

まずは俺達の依頼をシエラが読み上げる。

「……それだけだとしたら随分楽な依頼だね?」

「ボードレールは本当に慰謝料代わりの依頼のつもりなんだろうな」

「……ウルグ橋砦はここから歩いて1時間もかからない所にあるわね」

オーフェリアが地図を見ながらここからウルグ橋砦の距離を説明してくれた。

それにその間の距離では大した敵はいなかった記憶がある。況してやゲームよりもレベルが低いこの世界では尚更なのだ。

「じゃあ今回レムはお休みってことでそっちの依頼はディアベルとシエラの2人で……っ!」ピクツ!

「アンズ……?どうかしたのか?」

「……いや、ちよつとね」

(ウルグ橋砦へと向かっている気配がある……。しかもかなりの数だ。100を越えている。ディアベルがいれば然程問題はないだろうけど、数が数だ。ならここは……!)
「やっぱりその依頼はディアベルとシエラ、それとオーフェリアとツボミにも行つてもらおうかな」

「……どういうことだ?それだともう片方の依頼はアンズ1人で行くことになるぞ」

「それはその内わかるよ。オーフェリア、ツボミ、ちよつと耳を貸して」

アンズはオーフェリアとツボミに何やら耳打ちをした。何があるというのだろうか……?」

(……それは本当なの?)

(間違いないよ。さつき数が100を越える大きい気配とそれより更に大きい気配が1つあった。それがウルグ橋砦へと向かっている)

(ひゃ、100ですか!?)

(ディアベルがいればなんとかなるかもだけど、流石に数が数だから2人にはディアベ

ルのサポートをしてもらいたい。頼めるかな？)

(そういうことならわかりました。任せてください！)

(私も協力するわ。これから冒険を共にする仲間だもの。助け合うのは当然だわ)

(ありがとう2人共。2人に出会えてよかったです)

話が終わったアンズが依頼の答えを出す。

「というわけでそっちの依頼にオーフェリアとツボミが参加することになったよ」

「よろしくお願いします」

「……よろしくね」

「あ、ああ。それはいいんだが、アンズは1人で大丈夫なのか？」

「心配ないよ。私の依頼は報酬こそは少ないけど、ここからは近いし、難易度も高くないから私だけでばっばと終わらせるよ」

なんか他にも理由があるっぽいけど、詮索してもしようがないか。

「じゃあシルヴィ、そういう手筈でよろしくね」

「う、うん……わかったよ」

依頼の方は俺達の方に俺、シエラ、オーフェリア、アンズの4人で行くことになり、もう1つの依頼はアンズが行くことになって、レムは宿屋にて待機することとなった。

くそしてく

俺達は早速依頼を遂行しようとするのだが……。

「待て、そここの混魔族！」

なんか絡まれた。

第16話 エミール・ビュシエルベルジュっ!……失礼、
噛みました。

俺達は依頼のために外へ出ようとするんだけど……。

「待て、その混魔族!」

「あん……?」

「おまえだな? 最近町で噂になっている混魔族とは? 噂通りの悪そうな面をしているな」

な、なんだコイツは? なんか矢鱈爽やかな雰囲気纏っているが……。

「げげっ……!」

「え、エミール……!」

「知り合いかしら……?」

「い、一応……」

「見た目はとてもいい人そうですね……」

「う、うん……いい、いい人だよ……」

硬直してしまったシエラとレムはひとまず置いておこう。

「……噂とは一体なんだ？」

（なんか碌でもない噂のような気がするけど……）

「角の生えた見慣れぬ混魔族が女性に首輪をつけて連れ回していると……。おまえのこ
とだな？ 混魔族！」

（思った以上に碌でもない噂だった……）

（ドンマイ……）

（ぶふっ……！）

（そ、その内きつと良いことがありますよ……！）

俺が項垂れているなか上からアンズ、オーフェリア、ツボミだった。

おい、オーフェリアはなんで笑ってんだよ？

（というかこれは歪んだ王冠というアイテムで本物の角じゃないんだよなあ……。外し
て見せてやろうか？）

「……それでなんだコイツは？」

「冒険者ギルドで一番強いと言われている戦士です」

「その通り！」

コイツがこの辺りで一番強い戦士か……。

「俺様の名はエミール・ビュシエルベルジェル！ レベル50を誇るギルド一の怪力戦

士である!!」ドンッ!

(ギルド一の怪力戦士……?この人はどのような力を持っているのでしょうか?)

エミール・ビュシエルバルジュ……長いからもうエミールでいいや。エミールの名乗りを聞いた途端ツボミが興味深そうにエミールを見た。

そういうえばツボミも戦士なんだったな。剣をぶら下げてるし。

「角の生えた混魔族め、覚悟しろ!」

(とはいえこの挑戦者が挑戦してくるこの構図こそが魔王プレイの真髄なんだよな。この世界に来てから初めてこんな感じに挑まれるからちよつとワクワクしてきたな。ならそれに応えるのが魔王の務めというものだ)

「……誰の許しを得て名乗ったか小僧よ?」

(ディアベル!?)

(急にどうしちゃったの!?)

(なんかディアベルは楽しそうだね)

(そうですね)

(魔王になりきってるわね……)

「そつちこそ誰の許しを得て2人を引き回している?それにそちらの3人の女性も!」
(……なんだか巻き込まれたのだけれど)

(まあまあ、面白そうだから黙って見てよう)

(あはは……)

「女性のことが大好きなのだ!!」ドンッ!

「はっ……?」

(……何処の世界でもいるのよね。こういった女好きが)

(別の世界に行く度に彼のような人間を必ず1人は見るよね)

いきなり何を言ってるんだコイツは?

「レムちゃんとシエラちゃんを奴隷にするだけに飽き足らず、そちらの3人もたぶらかすとは……女性の守護者である俺が許しはしない!!」

「エミール、あのね!」

「この首輪はそういうのではなく……!」

「安心して2人共、今俺が助ける!」

シエラとレムが誤解を解こうとするがエミールは聞く耳を持たなかった。

(……可笑しな奴ではあるが、初めての挑戦者との戦闘だ。ゲームと同じ戦い方をするのか? レベル50ならそれなりの特殊技が使えるはず……)

「行くぞ、混魔族! 2人を解放してもらおう!!」ガバッ!

(あの構えはソードスマイトか……。一瞬で敵に突進して横薙ぎを繰り返す武技だな。

慣れたプレイヤーなら突進部分のみを使って横薙ぎをキャンセルして次の攻撃に繋げるんだよな)

「来い……………」

「はあっ!」ダッ!

(さて、どう攻撃してくる?)

「はっ!」

(なっ!横薙ぎをキャンセルしないで!?!意表を突いてきたのか?)

「ふん…………」ガキインツ!

「くっ…………!驚いたな。これを受け止めるとは!」

「ありえなさすぎて逆に驚いたぞ…………」

(今のエミールさんが使った技は様々な攻撃に繋げるための応用に使えそうですね。参考にしておきましょう) メモメモ

俺とエミールは罅迫り合いの状態になり、ツボミは何処から取り出したのかわからないがメモ帳を取り出してメモを取っている。

「これならどうかな?アルプスフォール!」

(アルプスフォールだ?!?あれは威力の高さと引き換えに技の発動までにかかなり時間がかかる技だぞ?こんな至近距離でか?)

「……力が高まってくる。この技を繰り出す時が俺様の勝利の時……」

「隙だらけだな」ガントツ！

「ギャフツ！」

技の発動まで待つてやる義理はないので俺はエミールを杖で殴り飛ばした。
「あの技がどんなものか見てみたかったです……」シヨンボリ

何故かツボミが落ち込んでいるが、触れると面倒なのでスルーしておこう。

第17話 誤解を解いて依頼へと出発。

アルプスフォールを発動しようとしていたエミールを吹き飛ばした俺はこう思った。

（まるで素人を相手にしているみたいだったぞ……。この世界ではプレイヤースキルも低いのか？まあコイツが馬鹿なだけかもしれないが……。ん？）

「俺は負けーん!!」ガバツ!

「ほう? 根性だけはあるみたいだな」

「この俺様が敵の前で倒れるなどありえん!」

根性のある奴は総じてタフだから戦う分にはかなり面倒なんだよな……。

「虐げられてる女性のためにも……俺は戦う!!」

「いいだろう……。俺も少し本気を出してやる。来い」

「行くぞ……! はあっ!」

「ストロップ!!」

エミールが立ち向かおうとするとシエラとレムが制止をかけた。

「レムちゃん!? シエラちゃん!」

「もういいんですエミール」

「希望を捨てるなレムちゃん！今俺が……！」

「そうではなく……」

「ん？」

「勘違い……かな？」

「へ？」

レムとシエラがこうなった経緯を話す。ようやく誤解が解けたか……。まあ俺も久し振りの対人戦で熱くなっていたからな。

くそしてく

「いやー、良かった良かった！隷従の首輪を強要された女性はいなかったんだな!!」

(ポジティブだな……。そしてメンタルも強い)

「すまなかつたな混魔族よ。名はなんと……？」

「……ディアベルだ」

「我が名はエミール・ビュシエルベルジエールの全ての女性と女性の味方だ！」

(要約すると女好きでありながら女好きの味方というわけね……)

(しっ！言っちゃいけません！)

「力が必要な時は何時でも俺様を頼るがいい。まあおまえも中々のものだな！」

「そうか……」

（なんで上からなんだよ……）

「また会おう！友よ!!」

エミールは高笑いしながら去っていった。まあ悪い奴ではないんだろうが……。

「すみません、私達のせいで誤解を招いてしまい……」

「気にすることはない」

「エミールは悪い人ではないし、実力も確かなのですが……」

「でもあの人馬鹿っぽいよね〜!」

（言っちゃったよ……）

「まあシエラとは仲良くなれそうな感じだがな」

「ちよっ!それどういう意味!?!」

「じゃあ私とレムは此方だから。4人共頑張つてね」

「ああ、アンズも頑張れよ」

俺達はそれぞれ依頼へと向かった。

アンズ side

ディアベル達と別れて、レムとも別れて私は依頼に向かいながら考えた。

(どうもディアベル達が行っている依頼はレムが断ることを見越しての依頼という感じがするね。セレスティヌ・ボードレル……。彼女とレムは知り合いらしい。また彼女が私達というよりはディアベルだけを指名している気がする。そしてディアベルを指名しての依頼ということはディアベルとレムを引き離すのが目的という感じがする。なんにせよ早めに終わらせてレムの所へ行かないとね)

私は早足で依頼へと向かった。

第18話 道中の出来事&とある密談。

「おつつかい♪おつつかい♪」

「シエラさん、なんだか楽しそうですね」

「こういうのってなんだかワクワクするよね！」

「一応依頼なのだから気を抜かない方がいいわよ」

（前方にて女子3人がガールズトーク……。なんか疎外感感じるなあ……）

俺達4人は依頼のためにウルグ橋砦へと向かっている。

ウルグ橋砦はゲームでは人喰いの森のモンスターからファルトラを守る砦という設定らしい。

「気持ちいいね〜！でもただの配達なんてちよつと退屈だね！」

「何事もないに越したことはないわ。さっさと終わらせましょう」

「そうだな。レムのことも気掛かりだし、早めに終わらせるぞ」

アンズも他の依頼に向かっているからレムは1人きりなのだ。なんか元気がないみたいだし早いところ合流しないといけないのかもな。

「退屈〜！……そうだ！水浴びしない？」

(は?)

「み、水浴びですか……?」

「うん、4人で水浴びしようよ!」

女子ときやつきやウフフと水浴びなんてできるほど俺のコミュ力高くねえ!だから嫌だ。しかも俺以外はみんな女子なんだぞ!?

「貴女……。今は依頼の途中よ?」

「オーフェリアの言う通りだ。クエストの途中でなにか水浴びだ。馬鹿らしい」

「でも退屈だよ!面白いことしたいよ!」

シエラが駄々っ子みたいになってる。ええい!小学生かおまえは!?

「面白いことねえ……。乱入でも起これば面白いかもな」

「乱入……?」

「ああ、低レベルのクエストにレベルの高いモンスターが現れることだ」

「ええ!やだよそんなの!!オーフェリアさんとツボミさんは何かないの!?!」

乱入が嫌だと言うシエラはオーフェリアとツボミに代案を求めた。

「そうね……。組み手とかはどうかしら?私達で実戦に近い形式で鍛練するの」

「それって3人と戦うってことだよな?」

「ええ、これが1番効果的な強化の仕方と言っても過言ではないわ」

「うくん……。怪我しちゃいそうなのはちよつと……」

オーフェリアの案は俺達で組み手をして実力の底上げをすることだった。俺としては2人の実力が気になるところだから賛成かもしれん。するとツボミはこんな意見を出した。

「あの、シエラさんは今朝アンズから鍛練のメニューをもらいましたよね？」

「あつ、うん。まだ内容は見てないけど」

そう言いながらシエラが取り出したのは小さい紙冊子だった。

「それを道中にこなせばいいんですよ。それならば退屈は解消されると思います」

「そうだね！えくと……」

（アンズの鍛練メニューか。一体どんな……）

俺達は紙冊子を見てみた。内容は……。

『鍛練メニューの内容はアスリートがよくやってる過酷な練習メニューを想像してね

☆』

「凄まじいな……」

「……アンズさんってこんなのをやってきたの？」

「これは昔ツボミがやっていたメニューね」

「懐かしいですね。当時の私は毎日筋肉痛と格闘してました」

（しかもツボミが昔やってたのかよ！）

俺とシエラはアンズが改めて規格外の人間だと思った。

アンズ side

さて、依頼もさつきと終わらせたし、早くレムの所へ戻ろつと。

（私の勘が正しかったらもう既にセレスティーナ・ボードレールがレムに接触しているはず……）

宿屋に到着つと。レムは……うん？あれは……。

「ガラクさんは罷免したわ」

「えっ？」

「協会の名前を独断で使つてレムさん達を危険な目に遭わせたんですもの」

どうやらレムと話している人がセレスティーナ・ボードレールみたいだね。付き人らしき人物が2人。流石は魔術師協会の長つていった感じかな。

とりあえず2人の話を聞いてみよう。

「そういえばガラクさんが気になることを言ってたの」

「気になることですか……?」

「ディアベルさんが魔王と名乗っていたらしいのよ」

「……ディアベルは異世界の魔王です」

ディアベルの話か……。やはり彼女はディアベルに疑惑の目を向けているようだね。

「本当に?」

「どういう意味ですか?」

「レムさんが召喚術士として有能なのはわかるけれど、異世界に魔王がいるなんて聞いたこともないし、いたとしても呼び出せるとも思えない……。もしかして貴女の持つ魂に惹かれて現れた魔族である可能性はないかしら?」

……彼女はどうやらディアベルはレムが抱えている何かにトリガーして現れた魔族だと疑いをかけているようだ。

(全く、何処の世界でも『こういつた世界』だと予測できる展開を見せてくれるよね。レムの秘密も気になるところだし、割り込んでみますかね)

「ありません!ディアベルが自分を殺す機会なら幾らでもありました!!それどころか

……」

「随分興味深い話をしているね。良かったら私も混ぜてよ」

私は笑顔で2人の間に割って入った。

第19話 攻めてくる脅威。

ウルグ橋砦へと到着。したはいいんだが……。

「あの男、魔族か!？」

（なんかデジャブ……）

「……なんだおまえらは？俺は別に魔族ではないんだが？」

（正確に言えば魔王なんだが……）

「黙れ！怪しい奴め!!」

「魔族でないならその角はなんだ!？」

（またこれかよ。いい加減取り外してやろうか……）

そう思っているところの男が制止をかけた。

「待てみんな、この人は混魔族だ。魔族じゃない!」

「ボリス……」

「多分今町で噂になってる角の生えた混魔族だ。女の子に首輪を着けてるっていう……」

（その噂を流したのは恐らくエミールだな……。良い噂とは言い難いが、助かったぜ）

「あの、私達はクエストで差し入れに来たのですが……」

「早めに終わらせたいから通してくれると助かるのだけれど」

「し、失礼しました。どうぞ」

俺達はウルグ橋砦へと入っていった。

くそしてく

「ところでポリス、さっきは俺を魔族と間違えたみたいだがなにかあったのか？」

「はい、実は先程巡回から報告がありました……。100体を越える魔族の大群がここに向かってきているらしいのです！」

「魔族が!？」

「100体!？」

「……どうやらもう情報がここまできているようね」

「そうですね。アンズの報告通りです」

信じられない報告に俺とシエラに対してオーフェリアとツボミはこんなことを言っている。

「2人共、この事をわかっていたのか？」

「私達もアンズから聞いたんです。100体を越える魔族がこのウルグ橋砦に押し寄せ

てくると……」

「だから私とツボミもこの依頼に参加したというわけよ」

アズは100体以上の魔族がここに来ることを予測していたってことか……。マジで何者なんだよ!?

(そもそも魔族って『クロスレヴェリ』じゃどのシナリオでもボス級の扱いだぞ!?それが群れで攻めてくるイベントなんて聞いたことないぞ!つまりこれはゲームではありえない大規模な乱入というわけか……)

「どうなっちゃうんだろ……」

(どうなるって言われてもな……。ゲームよりもレベルが低いこの世界だと考えるまでもなく全滅だろう。抵抗するまでもなく虐殺だな。だが……)

「問題はそこじゃない」

「えっ?」

「そもそもファルトラはボードレールの結界で守られているから魔族は入ってこれない。だから本来はこの遠征自体が魔族には無意味のはずだが……」

「なら魔族の狙いは別にあるということですね……」

ツボミの言う通り何か他に狙いがあるはずなんだが。

するとシエラがその答えを出してくれた。

「今の魔族は魔王クレブスクルムを復活させるためにあれこれ動いてるっていうけど……」

（だとしたら狙いはレムか？レムの体内に宿っている魔王の存在に気付いたということか？）

町に戻るか？いくら俺でも100体の魔族を相手にするのはちよつと厳しいからな……。そう思っているとボリスが俺達に何かを渡してきた。

「あの、これを……」

「これは……？」

「感謝の返事です。葡萄酒の受け取りの証明になるかと……」

いやいや、そんなことしてる場合か!?同じことを思ったのかオーフェリアが俺の気持ちを代弁した。

「……そんなことをしている場合かしら？この非常事態に」

「緊張感がないって言われるかもしれませんが、もしも今日が最後の1日だとしたら……ちゃんと生きたいと思ってます……!」

「貴方達は撤退しないんですか……？」

「お、俺達が撤退したら畑仕事をしていた人達や、足の遅い旅人が困るでしょうから……。皆が町に逃げ込む時間を稼ぐのが俺達の仕事です……!」

(どうやらボリスの覚悟は本物みたいだな……。それに)

「ディアベル……」

(ここで全滅してしまつてはこの世界は終わりだからな！)

「……ボリス、おまえの思いは受け取つた。あとは俺の仕事だ」

「えっ……?」

「俺が今日を最後の1日にはしない。魔族なんぞ追つ払つてやる」

「そんな……。無茶です!」

「無茶じゃねえよ。何故なら100体の魔族なんぞ朝飯前だからな」

(すいません、盛りました。結構キツいです)

内心震えているとオーフェリアとツボミが前に出た。

「私達も手伝います!」

「いいのか……。?かなり危険だぞ?」

「問題ないわ。私達はそのためにこの依頼に参加したと言つても過言ではないもの」

(成程、アンズはこうなることが予測できていたということか。だとしたら……。!)

とにかく今は100をも越える魔族と戦うことを第1にしないで!

第20話 侵入。

レム side

「随分興味深い話をしているね。良かったら私も混ぜてよ」

「アンズさん……？ 依頼は？」

「さつき終わったよ。とは言ってもそんなに時間のかかる依頼じゃなかったからね」

私と別れてからまだ1時間程しか経っていないというのにもう終わらせたというのですか？ 規格外ですね……。

「とりあえず初めましての人もいるから自己紹介ね。私はアンズ。異世界を転々と旅している者だよ」

「……セレスティーン・ボードレルです。アンズさん、私達に何か用でしょうか？」

「用もなにもレムは私の仲間だからね。依頼が早く終わったから仲間のもとに戻ってきたっただけだよ」

例え近場での依頼だったとしてもこんなに早く終わるのは流石に異常だと思えます。

「ところでセレスティーンさん、ちょっと質問いいかな？」

「構わないわ。それと私のことはセレスって呼んでね」

「ありがとうセレス。じゃあ早速……。レムとディアベルを引き離れた理由について聞きたいな」

「っ！……なんのことかしら？」

「惚けているふりが下手だね。まあいいや。誰から何を聞いたかは知らないけど、セレスはディアベルを魔族だと疑っている。またレムの中にある強大な魔力に惹かれて出てきたと言っていたね。さっきの話がちよつと興味深かったからついつい聞き耳を立てちゃったよ」

「それで？アンズさんは何が言いたいのかしら？」

セレスが言うようにアンズさんが言いたいことがよくわからない……。

「ディアベルはこの世界には不可欠な存在なんだよ。謂わばキーマンだね。そんな人間を魔族だと疑って攻撃しようだなんて思っていないよね？もしもそう思っておるならば……」

アンズさんはディアベルの必要性を述べた後にこやかに……。

「うっかり貴女を殺しちゃうかもね♪」

「っ！」

「ひっ……！」

そして殺気を放って宣言した。私はもちろんセレスも、そのお付きに至っては悲鳴を

あげるほどに怯えてしまっていた……。

そしてこの宿屋で何かが起ころうとしていた……。

レムside out

アңызside

軽く殺気を放ったその時……。

「ぎゃっー」

宿屋の店員さんの声だ。何かあったのかな？そう思っているとガラクとかいう嘯ませ……げぶんげぶん！いつか私達の前に現れた人物が息を切らしながら入ってきた。

「ガラクさん!」

「はあはあ……。セレス様！考え直して頂けませんか！どうしてボクが魔術師協会を出ていかなければならないのです!？」

（いやいや、それは君がそれだけのことをしたからでしょ……）

「貴方は間違ったことをしたのよ」

「ボクは正しいことをしました!!なのに皆ボクがクビになったという嘘ばかり吐いて……！だから痛め付けて本当のことを言わせてやろうとしたんです……!!」

（随分と過激だね。よく見たら全体的にボロボロだし、掌には血が滲んでいるし……）

「痛め付けたって……魔術師協会の皆は無事なの!？」

「ボクの心配をしてくださいよ!!」

「落ち着いて!冷静に話しましょう」

「うぐ……!皆可笑しいんだ!協会のために尽くしても結局誰も本当のボクを理解してくれない……!」

あゝあ、こりや手遅れだね。早いところ彼を精神病棟みたいなところに連れていった方が良さそうだ。

「……やっぱりアイツの言うことは正しかった」

（アイツ……?）

ガラクは何処からか禍々しい短刀を取り出した。

「止めるガラク!これ以上醜態を晒すな!!」

「こんな世界受け入れられるものか!」

（なに……?あの剣、よくわからないけど、嫌な感じがする……!）

ガラクが取り出した短刀の鞘からギョロリと目玉が出てきた。うわ……不気味だね。

「ボクがこの世界を正さなきゃいけないんだ!!」

「止めて!シャドウスネイク!!」

ガラクが叫んで自分に短刀を突き刺そうとして、レムがそれを食い止めるために召喚獣を繰り出す。

あれがこの世界の召喚獣……。私が昔旅した世界のデビルと呼ばれる生き物に類似しているね。

(ならツボミに渡した『あれ』もこの世界では役に立つかもね……)

「ぐっ……！」ドスツ！

「ガラクさん！」

「ガラク！」

レムが繰り出した召喚獣が止めようとするもガラクの自決が速かった。そして……。

「あ、ああ……あああ……！」

「そんな……！」

「セレス、近付いては駄目です！」

ガラクは苦しみながらも魔力を増加させていき、心なしか体格も大きくなっていく。

「そんな……。まさかこれは……！」

「……どうやらガラクという人物は完全に死んでしまったみたいだね。今私達の目の前にいるのは一匹の魔族というわけだ」

「魔族……！」

「ふう……。ようやくグレゴール様の出番か。何時までもグダグダと喋りやがって人間め……。ふんっ！」ブチイッ！

グレゴールとやらが自身を巻き付けていたレムの召喚獣を振りほどいた。

さて、この状況はどうしてやろうかね……。？

アンズ s i d e o u t

第21話 乱戦。

「みなさん、最後の通行人がここを潜りました。町に辿り着くまでの間に少しでも時間を稼ぐために今から門をおろします」

住民は皆避難が終わったようだ。

「ならもうおろしていいぞ。あとは俺達がやるから」

「思い直してください！ たった3人で戦うなんて無茶です!!」

「……いいからおまえも避難してろ」

「ディアベルさん!!」

「シエラ、ボリスを避難させろ」

「えっ?」

「ま、魔族が来たぞ!!」

「魔族の軍勢のお出ました……!!」

さあ、開戦といこうか。

「……………」

「どうやらあの魔族に乗っている女がこの軍勢の指揮官みたいね」

「ならアイツを退かせれば俺達の勝ちというわけだ」

「ディアベル、ツボミさん、オーフェリアさん……！気を付けてね……」

シエラはそう言っただけでボリスと一緒に避難した。

「さて、とは言ったもののあの軍勢をある程度なんとかしないと指揮官に近付けん……」

「ならここは私に任せてください……！」スッ

どうしようか迷っているところにツボミが名乗りを挙げて、腰に携えている剣を抜いた。

「何をする気だ？」

「突破口を作りますので、ディアベルさんはあの指揮官の女の子のところへ向かってください」

（ついにツボミの実力の一端が見れる。果たしてどれ程のものか……！）

「……いきます！蒼ノ一閃！」ズバツ！ カッ！

ツボミは刀を太刀に変化させて、それを降り下ろして稲妻を発生させた。

（なんて出鱈目な技だ。これで魔術反応が出てないっていうんだからよ……）

「……私も続こうかしら。塵と化せ（クル・ヌ・ギア）」ブアッ！

オーフェリアの方は腕を禍々しく巨大化させて、蛇のようにうねらせて魔族達を攻撃

した。

(オーフェリアの方も魔術反応はなし……。この2人も規格外だな……。今の技だけを見ても2人のレベルが最低120以上はあると思っていいな)

「……俺も2人に続くか。バーストフレア!!」ボウツ!

俺も指揮官の所へ向かうべく、魔術を使った。

くそしてく

「はあっ!」ズバツ!

「……はっ!」バシユツ!

(2人が軍勢を相手に加勢してくれているおかげで此方の魔力消費がかなり少なくてすむ。今ので大体80体くらいは倒せた。あと少しだ……。いっおっ?)

魔族から指揮官が降りてきた。改めて指揮官を見てみるとクリーム色の長髪に褐色の肌の少女が槍を構えている。

(恐らくコイツを倒せば終わりだろう。ゲームでも総大将を倒したらクリアだからな……。ここが踏ん張り所だ)

「何故魔獣から降りた?」

相手の動きを確認するためにも聞いておきたい。

「動かない、から」

（なんで片言？外国人？）

「何時もは、よく言うことを聞くいい子……。でも、貴方達を見てから、動かない」

「はっ！その魔獣は俺達に勝てないと本能で悟って動けなくなっただよ。利口じやないか」

「とうかこのまま退いてくんない？マジで。そう思っていると指揮官の少女は槍を振り回した。」

「エデルガルドは、魔族で一番の、槍使い。混魔族の魔術師なんかには、負けない……！」

「いいだろう。かかってこい」

「やる？やらない……？やる！」ドンツ！
エデルガルドと名乗った魔族との勝負が始まった。早く終わらせてレムの所へ戻らないとな……！」

第22話 蹂躪劇。

アンスサイド

「くくく、おまえがセレスティーン・ボードレールか？とりあえず死んどけやー」
拳を鳴らしながらグレゴールとやらが言う。

「馬鹿な人間のおかげで簡単に結界が突破できたぜ。流石のセレスティーンさんも擬態した魔族には気付かなかったようだな……」

（魔族に擬態……か。通りで人喰いの森でガラクに会ったときに妙な気配がしたわけだ）

私達に害を及ぼさなかったから見逃していたけど、見透しが甘かったかな？

「そんな……。ガラクさんが魔族の手引きをするなんて」

（セレスの方はある程度ガラクを信頼してたつていうのにこの様なんだから本当に滑稽だよ。……まあセレスもガラクの扱い方を心得ていたら少なくとも自ら魔族を手引きすることもなかっただろうけど。いや、時間の問題だったかな？）

「唆されたなガラク！」

「レム様！セレス様をお願いします!!」

「……わかりました！」

「逃がすかよ!!」グアツ!

問題です。グレゴールとやらはセレスを殺すつもりで、セレスのお付きの2人はレムにセレスを逃がしてもらって自分達で戦おうとしています。

そしてグレゴールとやらはそんな2人を逃がすつもりはなくて、お付きもろとも全滅させようとしています。

序でに私は空気です。さて、どうすればいいでしょう？

正解は……。

バシイツ!!

「何やら楽しそうなことをしようとしてるね。私も混ぜてよ」

『アンズさん!?!』

「チツ!なんだてめえは……?」

この騒動に乱入してグレゴールとやらを食い止めることでした♪

「とりあえずここは私に任せてよ。レムとお付きの2人はセレスを安全な場所へ誘導しておいて」

「わかりました……。アンズさんも気を付けてください！」

「了解」

「くそっ！逃がすか!!」ググググ

「私に力勝負を挑むつもり？だとしたら片腹痛いね」

レム達がここから離れたところに避難したのを確認するとグレゴールを軽く外へ投げ飛ばした。

「ちい……。まあいい。先にてめえを殺してやる」

「私を？面白い冗談だね。君じゃあ私には逆立ちしたって勝てないよ」

「なんだと……。？」

「だからハンデをあげよう。そうだね……。私は足だけで戦うってのはどうかな？」

「俺様を嘗めてんのか!？」

「安心しなよ。君程度なら嘗める必要もない」

「はっ！自信満々のようだな！このグレゴール様は人喰いの森では一番の魔術師なんだよー！」

「へえ？それで？」

ぶっちやけ興味ない。

「俺様が好きなのはてめえみたいに自信満々の人間を絶望させてやることだ……。その

瞬間の顔が最高に堪らねえ!!」

悪人らしきクズみたいな思考の持ち主のようだ。

「御託はいい……。さっさと来なよ。それとも此方から行こうか?」

「その嘗めた判断を後悔するんだな!」ドンツ!

グレゴールが此方に攻撃を仕掛けてきた。

「はあっ!」ブンツ!

「首肉(コリエ)……」ヒョイツ!

私はその攻撃をかわして蹴りを仕掛ける。

「シユート!」ドガツ!

「がっ!」

うむ、良い具合に吹っ飛んでいったね。

「てめえ!何をしやがった!」

「何って……ただの足蹴りだよ?」

ディアベル達も気掛かりだし、さっさと終わらせませるか。

「さて、どんどんいくよ。肩肉(エポール)!背肉(コートルト)!鞍下肉(セル)!

股肉(ジゴ)!胸肉(ポワトリーヌ)!」ドガツ!バキツ!ドゴツ!

「ぐわあっ!!」

「羊肉（ムートン）シヨット!!」ドガツ!

私は続けざまに足蹴りを繰り返してグレゴールを蹴り飛ばした。

「く、くそつ!この俺様が……!こんな……!」

（ん?これはレムとセレスの気配?此方に来ているみたいだし、さつさと終わらせよ）

「あれだけ大口を叩いたのにこの程度か……。もう飽きた。だから終わりにしよう」

「この俺様が貴様なんかに負けるわけが……!」

「見苦しい」ドカツ!

私は周辺に被害が及ばないようにグレゴールを上空に蹴り上げた。

「消えろ。消去（デリート）プロミネンス」カツ!

そのまま技を放つて完全にグレゴールを消し去った。それと同時にレムとセレスが

此方に来る。

「アンズさん!無事ですか!」

「私は見ての通りピンピンしてるよ」

（強いて言うならちよつと動き足りないけどね……。思ったよりも手応えがなかったん

だよねえ。殆ど足しか使っていないけど）

「それより2人はなんで此処に?」

「アンズさんが気掛かりで……。それよりあの魔族は……?」

「消した」

「は……?」

「だから消したんだよ。跡形もなく」

（あの魔族をこんなにあつさりと?彼女は一体……?）

「ねえセレス、幸いまだ大きな騒ぎにはなっていないみたいだから町の人達には何事もなかったように振る舞えば今回の騒動はなかったことになるかな?」

「そ、そうですね……。ですがガラクさんが……」

「なら後日にガラクを弔うことにしよう。それでいいかな?」

「はい……」

とりあえず此方は終了つと。私もディアベル達の所に行こうかな?

アンズ side out

第23話 終戦。

ブンツッ！シュツッ！シュシユツッ！

「はあっ！」ブンツッ！

「……………」ヒョイツッ！

エデルガルドの攻撃をさつきから避け続けているディアベルさんです。

（この速度……。恐らくレベル80前後と見ていいな。だがな……………」

「その程度の力量で俺に勝つつもりか？愚かだな」

「……………」じゃあ、これ、使う」

このままでは勝てないと判断したエデルガルドは槍を上空に掲げた。

「な、何あれ!？」

（サクリファイスチャージか……。確か自身のHPを引き換えにして放つ大技だったな。これを凌げばアイツの戦意を喪失させることができるかもな。なら……………」

「……………」いいだろう。かかってこい。俺は逃げも隠れもせんぞー！」

「うん、いく……………」

（さて、もしかしたらこの世界に来てから初のダメージになるかもな）

「サクリファイス……チャージ!!」 ドンッ!

エデルガルドのサクリファイスチャージが此方に向かってくる……のだが……。
「危なっ」 パシッ!

「なっ……!!」

「あ、アンズ!!」

「アンズさん!!」

突然現れたアンズがサクリファイスチャージを槍ごと受け止めた。

「アンズがどうして此処に……?」

「ちよつとディアベル達に報告と……その魔族の女の子に用事があつてね」

「あり、えない……。渾身の、一撃、なのに……」

アンズは槍を受け止めながらそう言う。対するエデルガルドは信じられないという目でアンズを見ている。

「報告だと……?」

「うん、まずはファルトラに魔族が潜入してたんだ。ガラクとかいう奴がその手引きを
してたみたい」

「なんだと!?!」

（あの小物……! 本当に余計なことしかしねえな! 狙いはボードレールか!?! それとも魔

王クレブスクルムを封印させているレムか!? 急いで町に戻らないと……ってそれならなんでアンズは此処にいるんだ?)

疑問に思っているとアンズが続きを話す。

「まあソイツは私が消したから問題ないよってという報告をディアベル達にしたかったんだ」

(成程な。というか消したって……。改めてアンズの規格外つぷりを聞いてしまった気がするな)

「それで……」

「ぐっ……！ 離、せ！」

「さてさて、君はどうする? 君の仲間であろう魔族……名前はグレゴールっていったかな? ソイツは私が跡形もなく消し飛ばしちゃったし、もう攻めに来る理由はないんじゃない? それに……」

「アンズ、終わったわ」

「魔族の軍勢を殲滅させました！」

「君が連れてきた愉快的仲間達は私の仲間によつて全滅したようだよ。それでもまだ戦うつもり?」 パッ!

アンズは槍を離してエデルガルドに問う。

「というかアンズもすげえが、100体を越える魔族達を俺も一緒に滅らしたとはいえたった2人で壊滅させたこの2人もやっぱりすげえな……」

「っ！……ここは、撤退、する。だけど、私は、魔王様の、復活を、諦めない」

「まだわからんみたいだな。真の魔王はこの俺、魔王ディアベルに他はない!!」ドンツ！
「!!……真の、魔王？」

（なんかディアベルを見ると『勇者の癖に生意気だ』というゲームを思い出すね……）
「くっ！」タンツ！

エデルガルドは得心がいかないといった感じで撤退した。

くそしてく

依頼から3日が経過した。魔族の尖兵を町に忍ばせていたらしいが、アンズがソイツを処理したおかげでたいした騒ぎにもならなかったようだ。

依頼が終わってからの俺達はアンズ達と一緒に鍛練をしつつ、新しい依頼をこなすということの繰り返しとなっている。

今ではシエラもアンズの考えたトレーニングメニューを日課としてやっているようだ。……もう武道家にもなったらしいんじゃないのか？

そしてさらに数日後のある日にシルヴィが俺達のもとに尋ねてきた。

第24話 防衛。

俺達が次の依頼をどうするか6人で話し合っているとシルヴィが宿に尋ねて来た。ちなみに今いるのは俺とレムとシエラが泊まっている部屋な。

「やあ、みんな。元気でやってるかな？」

「まあそこそこな。……ところでなんの用だシルヴィ？」

「ディアベルさん達が興味ありそうな話を持ってきたんだよ」

俺達が興味ありそうな話？どんな話だろうか……。皆そう思っているとオーフェリアが代表してシルヴィに質問する。

「それってどんな話かしら？」

「エルフの王国からファルトラ市の領主にシエラ・L・グリーンウッドの引き渡し要求が届いたよ」

「えっ……？」

なんだと？……事の真相はわからんが、詳しく聞く必要があるな。

「期日は10日後で、実行しなければ開戦も辞さずってね」

「開戦!？」

「正気ですか!? 人族同士で争うなどと……!」

「……穏やかじゃないね」

「なんとか穏便に解決できないかかってさつき領主に依頼されてね」

「おいおい、まさかとは思うが……」

「おまえはシエラを引き渡すことをクエストとして受けたつていうのか!」

「落ち着きなよディアベル。流石にシルヴィもそんなことはしないとと思うよ。……まあもしもしてたらこの場に1つ新しい死体が転がってるかもだけどね」

「待った待った! ボクがそんなことするわけないでしょ。魔族の軍勢を撃退しちゃうよ
うな人達からボクがシエラちゃんを奪えると思うかい? つていうかアンズちゃんもさ
らつと怖いこと言わないでよ!」

「……馬鹿ではないみたいだな」

「冗談だよ。……多分」

「今多分って言わなかったアンズちゃん!」

「気のせい気のせい。とりあえず話を戻したら?」

「つていうかもしもシルヴィがシエラを引き渡すような真似をしてたら間違いないア
ンズはシルヴィを殺していただろうな。その時のアンズから僅かに殺気が漏れていた
し。」

まあアンズがやらなかったら俺がやっていただろうし。

「……ンンツ！それじゃあ困っているボクと領主からのクエストだよ。エルフの王国との戦争を防いでほしい。頼めるかな？」

「戦争を……防ぐ？」

「シエラちゃんを手放したくなかったらつてことだよ。まあどうするかは皆に任せよう」

「嘘でしょ……？あたしのせいで戦争になっちゃうの？」

シエラが動揺するのも無理はない。自身の身柄1つで母国が戦争をしなければいけないということだからな。

「このままだとね……。だからボクも領主も困ってるんだよ」

（あの時にシエラは家に帰るつもりはないと言っていたはずだが、まだ諦めてないのか？やれやれ……）

「だから私達に上手く戦争を防いでほしい……ということですか？」

「ツボミちゃんの言う通りだね。どうかな？」

ふっ、戦争を防いでほしい？全力で断る!!

（戦争を防ぐってどうやってやるんだよ？交渉？それができるコミュ力があったら今頃俺はリア充人生を謳歌してるっつーの!!そういうのは偉い人達でなんとかしてくれよ

！)

……でもまあ現実はそのはいかないんだろうなあ。

「ちなみにグリーンウッド王国のキイラ王子がシエラちゃんに対して多額の懸賞金を賭けたらしいよ」

「……なんだと?」

「実の妹に懸賞金賭けるってどんな神経してんだよ!？」

「兄さんが……?」

「非常識な……!」

シエラは信じられないといった感じでレムは唇を噛み締める。するとアンズがシルヴィに尋ねた。

「それってどれくらい額の?」

「平民なら一生遊んで暮らせる額だ……。今後不心得者の冒険者がいつシエラちゃんを狙ってくるかもわからない」

「つまり外を出歩くのは危険……ということか」

「そんな……。そんなのって……」

「シエラ……」

キイラ・L・グリーンウッド……。アイツはやっちゃあいけねえことを仕出かしたな。

「ディアベル……?」

「シエラ、他の誰がおまえを狙ってきたとしても俺が指一本触れさせはしない」

「ディアベル。そこは俺達はって言ってくれないと駄目だよ」

「そうね。シエラは私達の仲間なもの」

「シエラさんを捕まえようとする不届き者は成敗します!」

「皆……」

「決まりだね」

「ああ、シエラをグリーンウッド王国には渡さん!」

俺達が絶対にシエラを守ってみせる!!

第25話 ファルトラの領主と派遣された国家騎士。

俺達はシエラを守るために動くことを決意した。

「グリーンウッドについてはどうしますか？」

「クエスト攻略の基本は情報収集だ」

「……ということは今から領主に話を聞きに行くってことだね」

「ああ。馬鹿げた戦争なんて起こさせるわけにもいかないしな」

ということとどりあえず……。

「それぞれ身仕度を済ませて外へ集まるぞ」

「案内はボクに任せてね！」

シルヴィの案内の元に俺達は領主に会いに行くことになった。

〜そして〜

「領主はこの町の英雄なんだ〜」

「英雄っていうのは……？」

「今から30年前、まだ魔王がいた時代に最前線で戦って1人で何体も魔族を倒してる

んだよ」

「成程、それで英雄と呼ばれる訳ね……」

「この前のディアベルやツボミさんやオーフェリアさんみたいだね」

「そいつの場合はたった一人で複数もの魔族を倒してるってことだが……」

（数こそは俺の方が多かったかもしれないが、あの時はツボミとオーフェリアがいてくれたおかげで消耗が極僅かですんだ……。しかしあの時俺一人だったら果たして魔族の軍勢を退けることができたのか……？）

「ちなみに領主って話しにくい雰囲気とか持ってたたりするのかな？」

アンズが領主がどんな人物かをシルヴィに尋ねた。確かに気になるところではあるな。

「うくん、厳格っていうか、ちょっとおつかないんだよね。だからディアベルさん……」

シルヴィは苦笑いしながら此方を向いた。なんだ……？

「くれぐれも言葉遣いには気を付けてね……？」

シルヴィの言葉にレムとシエラは硬直し、ツボミは苦笑い、アンズとオーフェリアは何かを察したような表情をした。

（えっ？何？なんだってんだ……？）

一抹の不安が頭を過るが、とにかく領主の所に向かうことにした。

くそしてく

……で、領主の所についたわけだが。

「……………」

「ど、どうもガルフオードさん。今日も良い天気だねく」

「……………」

シルヴィの話題のようなものに対して表情がピクリとも変化していないガルフオードとやらを見て俺は思った。

（怖い！めっちゃ怖い！今の俺は冷や汗と脂汗がタラタラと垂れているだろう。もうこいつが魔王でいいんじゃないか!?!）

オーフェリアの方を見てみると冷や汗を流しているし、ツボミはゴクリと唾を飲み込んでいる。

（アンズは……?アンズはどうなんだ!?!）

そう思い俺はアンズを見ているが、特に畏縮しているわけではなく、何かを考えている様子だった。

（領主さんの実力は魔力を使わないで戦うツボミとほぼ互角といった感じかな……?ど

うにかして彼とツボミが戦うような機会を作っておきたいところだね)

アズが何を考えているかはわからん。とりあえず早くここから出たいザマス!

そう思いつつ、シルヴィとガルフォードが話を進める。

「例の件、ディアベルさんにはクエストを請け負ってもらったよ」

「……ならば速やかに問題を解決するといい。私への報告はクエスト完了の後で構わない」

「えつと……。なんせクエストの難度が高いからね。もう少し情報をもらおうと思って……」

「必要なことは話したと思っただが……?」

「……まあそうなんだけど」

シルヴィも汗まみれだな。その気持ちはよくわかる。

「……そうだ! 自己紹介くらいはしてもいいんじゃないかな?」

「……やれやれ、冒険者は領主の名前も知らんか」

もうさつきから場が凍り付きすぎ! 勘弁して!!

「私はチエスター・レイ・ガルフォード中将だ。国王陛下より城塞都市ファルトラを預かっている」

やっぱりというか威圧感はない。

「レム・ガレウ。冒険者です……」

「シエラ・L・グリーンウッドです……」

レムとシエラが名乗り終えると此方を見る。ふう、腹あ括るか。

「……ディアベルだ。話を聞きに来たのだが」

（よし、なんとか上手くできたぞ！心なしかレム達も安堵している！）

「報告によると君は異世界の魔王だと称しているとか……。本当かね？」

ギランー……じゃなくて無難に。

「……だったらどうだというんだ？おまえには何も関係がないだろう」

「デイ、ディアベル……」

……あれ？もしかしなくてもまずった？

「……ふん、次はこの3人の紹介も聞こうか？」

（なんかまずった気がするが、なんとか乗りきった。あとは頼んだぞアンズ……）

「御初に御目にかかります、ガルフォード中将殿。私はアンズと申します」

アンズは膝をつけてそれは宛らガルフォードに忠誠を尽くす騎士のように様になっていた。

「後ろの2人は私の仲間のツボミとオーフェアです。以後お見知り置きを……」

ツボミとオーフェアはアンズの紹介と同時に頭を下げる。

「……その3人は幾分かマシのようだが、やはり冒険者というのは可笑しな連中だ」
「えっ……？」

「後ろを見たまえ」

ガルフォードの指示に従って俺達は後ろを向いた。

「町の南東にあるセプリア湖。その東側に広がる森に今エルフが潜んでいる……。まだ数はわかっていないが、王国の勢力を考えても多くて1000というところだろう」

「1000かぁ……」

「軍隊にしては少ないですね」

確かに少ないな……。エルフ達が魔族のような実力を持っているならば、1000という数も多く感じるだろうが……。

「数こそはそうでも、エルフが住んでいる森は広いからね。1000のエルフそれぞれ木々に隠れて不意打ちでもすれば恐らく多くの兵が失われるよ」

「エルフ達はそれを得意としている故にエルフ達が待ち構えている森に部隊を投入すれば彼女の言う通り多くの兵が失われることになる……。無理に部下を失わせるのは私の最も意味嫌うことだ」

「……それで俺達を使うということか」

「君達が王女を引き渡すというならその必要はないのだがね……」

「ひっ……」ビクッ！

ガルフオードがシエラを引き渡す等とトチ狂ったことを抜かすもんだからシエラがヒビつてんじゃねえか……。

「そんなことさせるわけがねえだろ……！」ギロツ！

俺はガルフオードを睨む。正直ガルフオードは怖いが、シエラを守ると決めたからな。

「……シエラ王女。裕福な暮らしを捨て、危険な冒険者に身をやつしてまで何を求めているのだね？」

「あたしは……」

シエラはガルフオードの質問に声を震わせながら応えた。

「あたしはあたしでいる理由がほしかったんです……。血筋とかじゃない、有りのままのあたしの価値が知りたかったんです。それはエルフの国では手に入らないような気がして……」

「……成程」

「わかってくれますか……？」

「共感できる筈が無かろう。まあ知識としては覚えておくがね」

「そうですか……」

ガルフォードに共感してもらえずシエラは哀しそうにしている。だがしかし……。

「別に共感してもらわなくても必要はないと思うよ？」

「えっ？」

「アンズの言う通りだ。好きなだけ苦労して、好きなだけ努力して、好きなだけ限界にぶつかって、己の力で手にした成果を嘯み締める……。自分の決めた道なら他の奴がどう言おうが惑わされるな」

「それが自由に生きるということだよ」

「ディアベル……。アンズさん……」

「ではシエラ王女は引き渡さない。君達がグリーンウッド王国との戦争を回避する手を打つ……。そういうことで良いのだね？」

「ああ、もちろんだ。シエラは俺達の仲間……。手出しはさせない」

「……任せよう。そしてその件を含めて王都から人が派遣されてきている。紹介しておこう」

派遣だと……。そう思っていると扉が開かれた。中に入ってきたのは眼鏡をかけた女性騎士のようだが……。

「国家騎士のアリシア・クリステラと申します。国王陛下から問題の解決に当たるよう御加盟を賜っております」

「国家騎士だっ!?」

「どうぞよろしくお願いします」

こりやまた大変なことになりそうだな……。。